

第5節 古墳時代

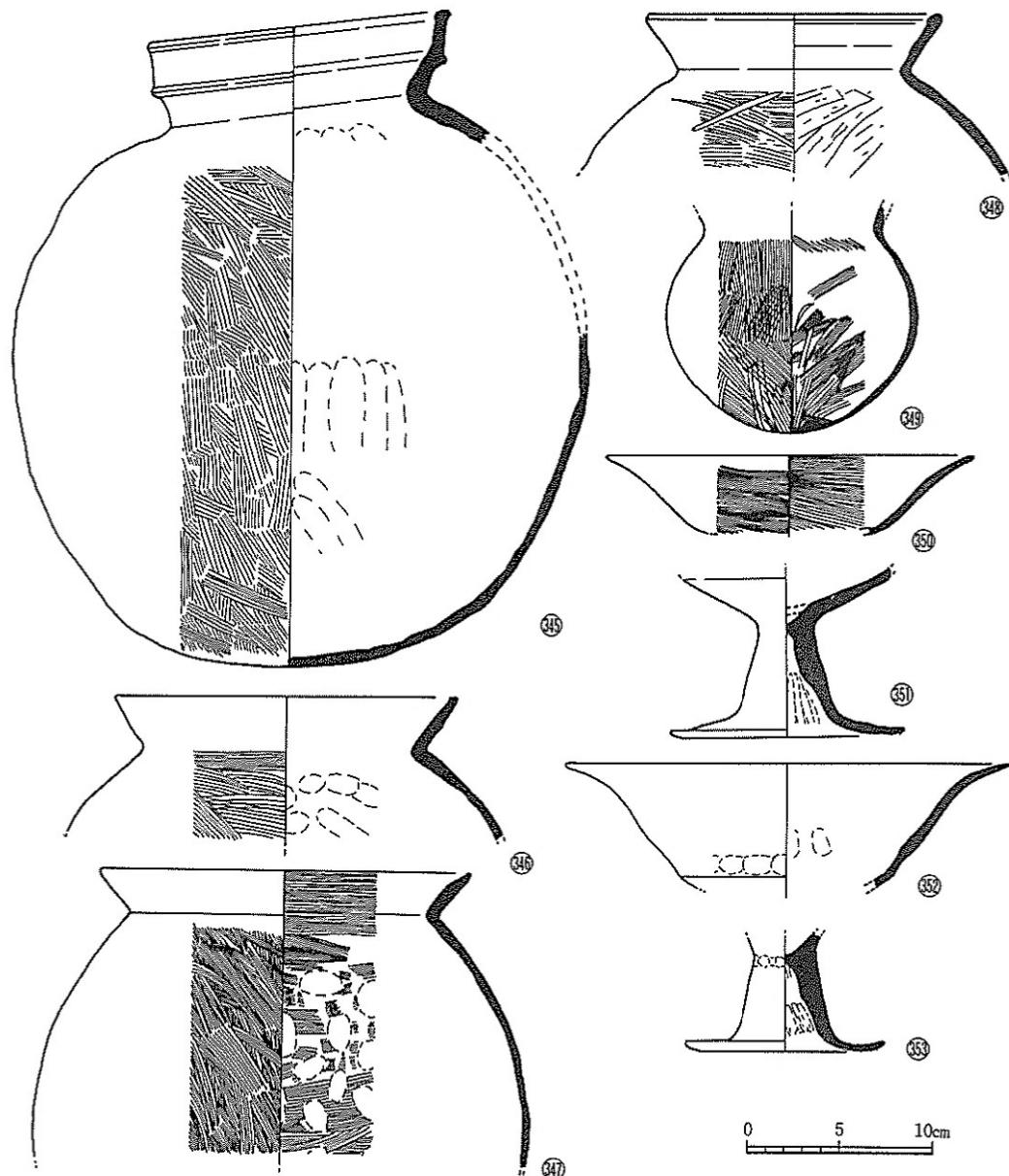
今回の調査において検出された古墳時代に属する遺構としては、古墳、溝状遺構群、自然河川などがある。これらはすべて古墳時代中期、後期に比定される遺構であり、古墳時代前期に属する遺構は全く検出されず、包含層からの出土として黒色粘土上面で土器が検出されたのみであった。

第1項 古墳時代前期

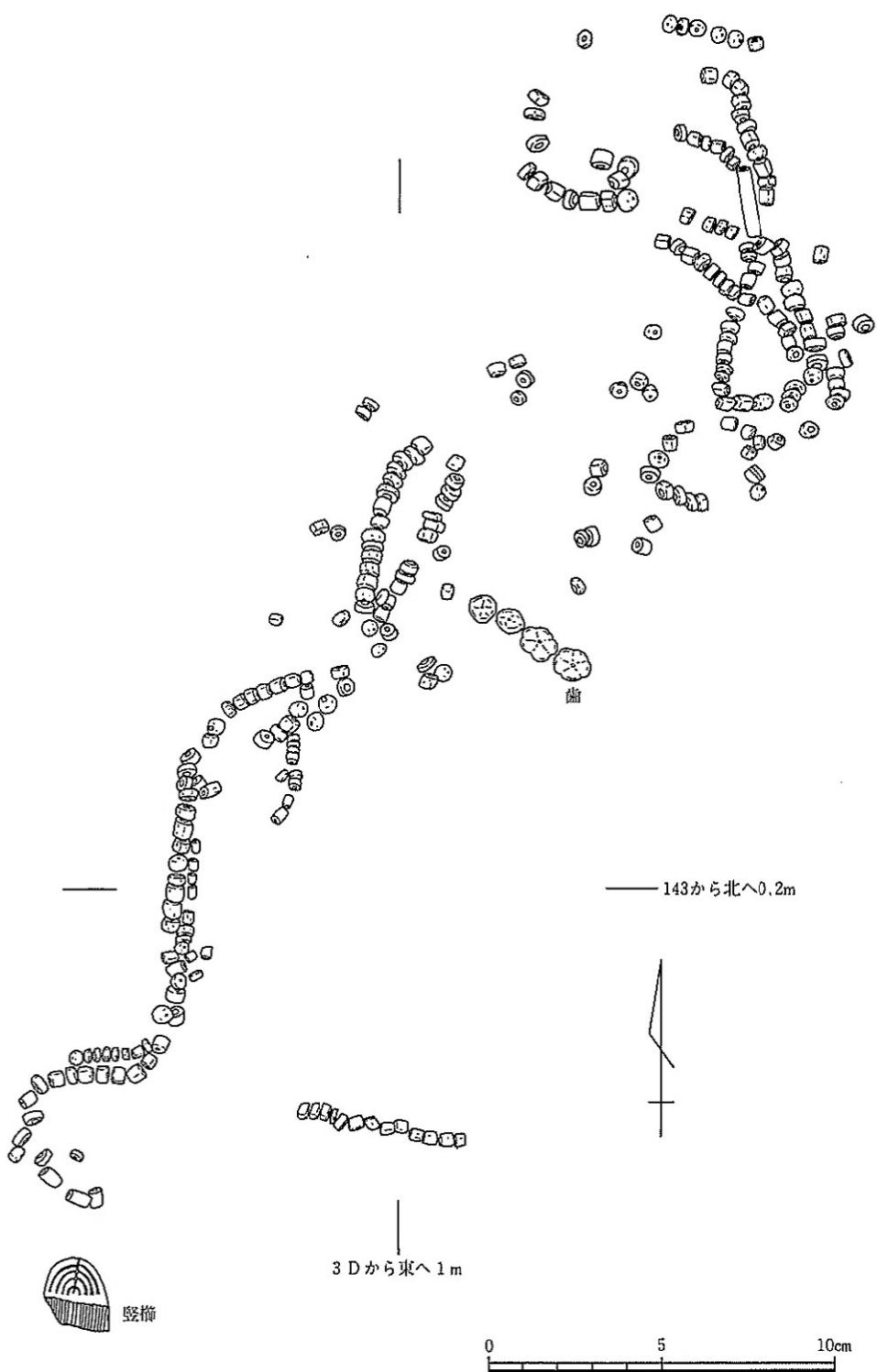
古墳時代前期に属する遺構が全く検出されなかったのは前述の如くであるが、黒色粘土上面で調査区の比較的広い範囲にわたって古墳時代前期後半（布留式期）の土器（345～353）が検出された。この黒色粘土上面をベースとして古墳が築造されており、したがって、黒色粘土上面は古墳時代前期後半から古墳時代後期初頭にかけてまでの遺構面となっていたものと考えられる。

黒色粘土上面出土遺物（345～353）（345）は口縁の立ち上がりが外方に短く伸び、その後直立気味に上方へ立ち上がる。いわゆる二重口縁の形態を呈する甕で、体部は比較的縦長で胴張りの楕円形を呈している、口径16.7cm、器高約35cmを測った。器面の調整は体部外面には荒い右下がりの刷毛調整を施しており、内面は指によるナデである。色調は淡茶褐色を呈し、体部外面には黒斑が認められる。（346、347）はともに甕で、口縁部がやや内弯気味に外上方へ短く立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。器面の調整は外面が荒い刷毛調整で、内面は指押さえの後刷毛調整を施すもの（347）と、指押さえのみで未調整のもの（346）がある。口径19cm～20cmを測った。（348）も甕で口縁部及び体部上半のみの破片であるが、口縁の立ち上がりが比較的直線的に外上方へ伸び、口縁端部が内に肥厚するものである。器面の調整は外面を刷毛調整、内面はヘラ削りを施しており、口径15.8cmを測った。体部外面上半部分に1ヶ所「X印」のヘラ描きが見られる。（349）は鉢で、口縁部を欠損している。全体的に丸味をおびており、体部最大径はほぼ中位にある。体部最大径約13.5cmを測った。器面の調整は外面上半を比較的ていねいな縦方向の刷毛調整、外面下半は放射状に荒い刷毛調整を施している。内面の調整は下半が荒い刷毛調整、中位は細かい左下がりの刷毛調整である。上半は遺存状況が悪く不明瞭である。外面全体にススが付着している。（350）は高壺の壺部であり、壺底部、脚部を欠損している。口縁の立ち上がりはわずかに内弯しつつ外上方に立ち上り、その後外反して終る。口縁端部は丸く収めている。口径19.8cmを測った。器面の調整は内、外面ともに横方向の細かい刷毛調整である。（351）は高壺の壺底部及び脚部の破片である。壺底部はわずかに内弯しつつ外上方へ伸びる。脚部は下方へ開きつつ伸び、底部に至って屈曲し外方に開いており、口縁端部は軽くつまみ出したのち丸く収めている。脚底部径12.8cmを測った。表面が剥離しており、器面の調整は不明である。（352）は高壺壺部の破片で、壺底部、脚部を欠損している。口縁部の立ち上がりは直線的に外上方へのび、その後大きく外反して終る。口縁端部は丸く収めている。壺底部と口縁部との境にはわずかに稜が見られ、口縁部と底部を別個に作り接合

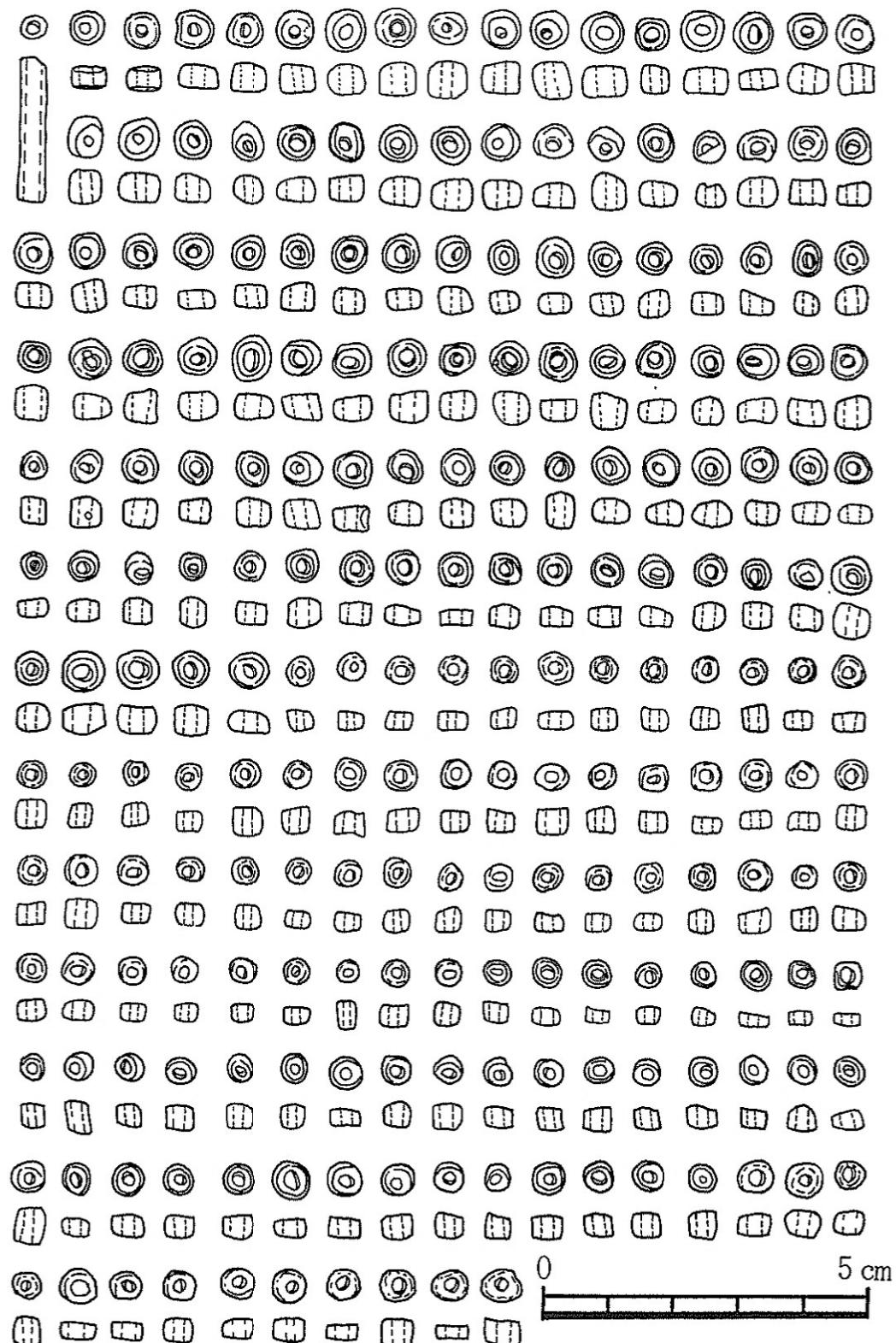
したものと思われる。口径24cmと比較的大型である。器面の調整は横ナデが主であり、接合部は指で整えたあと横ナデしている。(353)は高环脚部の破片である。比較的低い脚部で、脚胴部は外下方に直線的にのび、脚底部に至って屈曲し、ほぼ水平に外方へ開いている。端部は軽くつまみ出した後丸く收めている。器面の遺存状態が悪いため調整は不明瞭であるが、脚胴部内面にはしづり目が残っている。脚底部径10.8cmを測った。



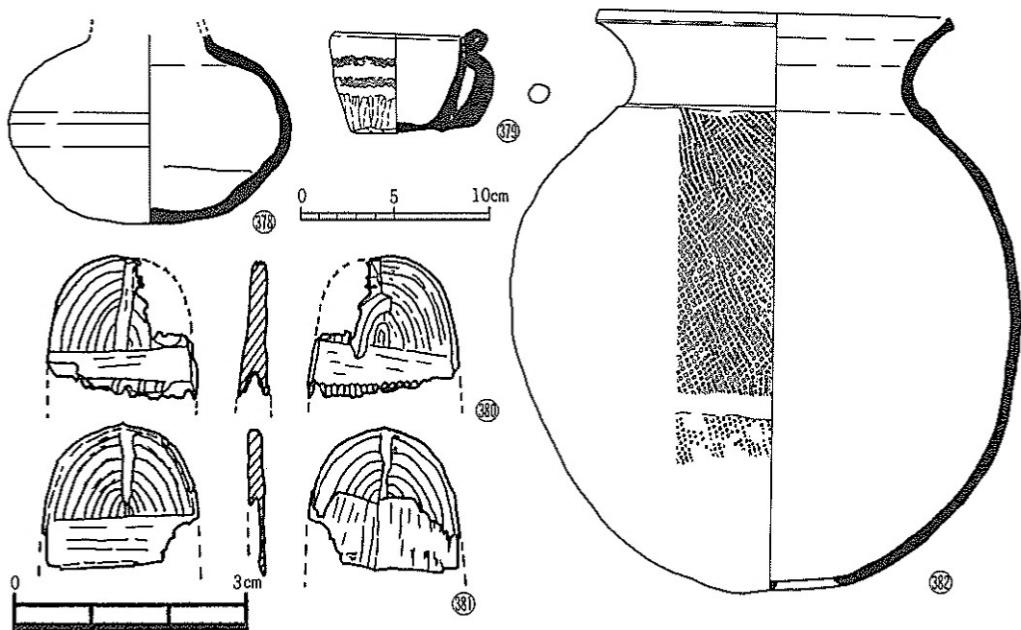
第127図 黒色粘土上面出土遺物



第135図 城山4号墳主体部内副葬品出土状況図



第136図 城山4号墳主体部内出土玉類



第137図 城山4号墳主体部内副葬品・墓塙内・周溝内出土遺物

土をして築造しており、盛土はおおまかに4層に分けられる。周溝内の埋土は7層に分けられ、その堆積状況からみて周溝は徐々に埋まっていったものと思われる。墳丘頂端部から周溝底面までの高低差は約0.9mを測った。

主体部は墳丘中央で1基検出された。組み合せ式木棺直葬である。主体部の主軸は墳丘の主軸方位とほぼ一致し、N-52°-Wを示している。木質は完全に腐蝕しており、わずかに痕跡を残すのみであった。内寸で長さ約3m、北西側小口部約1.3m、南東側小口部約1.1mを測った。木棺内部から、極くわずかではあるが人骨片、人歯が検出された。歯の出土位置から見て頭部は南東にあったものと思われる。又、頭部の北西側の胸位にあたる部分で水銀朱が検出された。これは遺体の胸部に塗付されていたものと思われる。

副葬品は木棺内部のほぼ頭部にあたる部分から、管玉、ガラス小玉、豊櫛などが検出された。これらはすべて、被葬者が身体につけていた服飾品であったと思われ、ほぼ原位置を保っているものといえる。管玉は直径4mm、長さ2.3cmで薄緑色のグリーンタフ製で、片側からの穿孔で粗雑なつくりを呈している。ガラス小玉は258点検出された。その他に破片も相当数あり、全部で300点を超えるものと思われる。濃い青色を呈するものと縁がかったものの2種類あり、径3mm~5mm、厚さ2mm~5mmを測った。すべて片側から穿孔している。これらは管玉をも含めて一連のものであり、部分的に欠けている所も見られるがほぼ現位置を保っていた。二重にして首にかけられていたものである。豊櫛は2点検出された(380、381)。いずれも頭部のみの破片で、刃部は欠損していた。細かい竹ヒゴを8本そろえて曲げ、黒漆を塗付して固めたものである。(380)は現存長1.4cm、幅2cm、厚さ2mm~4mm、(381)は現存長2cm、幅2cm、厚さ2mmを測った。

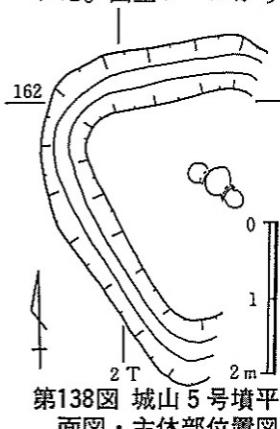
供獻遺物と考えられる土器は3点検出された(378、379、382)。(378)は須恵器で、龜の

体部と思われる。(379)は椀である。断面円形状の把手を有し、把手の上端部を外側に折り込んでいる。平らな底部から体部が直立気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸く收めている。体部下半にヘラ削り痕がみられる。体部外面中位付近に2帯の波状文を配している。口径7cm、器高5.3cmを測った。(382)は甕で、口縁部が外反しつつ立ち上がり、口縁端部には平らな面をもつ。体部は胴張りの楕円形状を呈する。体部外面に細かな格子状タタキを施している。口径18.5cm、器高30.7cmを測った。底部を穿孔している。淡青灰色を呈し比較的軟質である。(378,379)はともに韓式土器と思われる。(379)は周溝内からの出土で、(382)は主体部墓塚内の、足元付近で検出された。出土レベルからみて、木棺天井板上の足元付近に置かれていた可能性が高い。

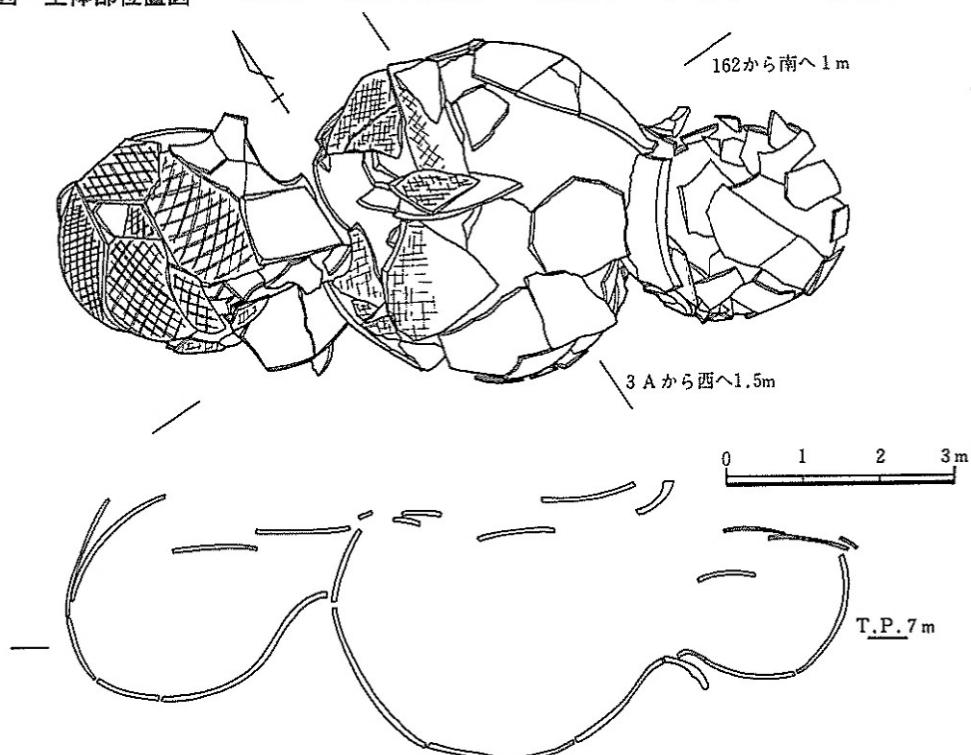
城山4号墳は古墳時代中期後半に築造されたものと考える。

〈城山5号墳〉 城山4号墳の南側の、2T~3A、161~162の地区で検出された方墳である。墳丘の主軸方位はN-32°-Wを示している。墳丘の四角のうち、東コーナーは調査区外にあるが、その他の3つのコーナーを検出し得た。3m×3mの四角形状を呈し、その周縁に幅約0.6mの周溝を巡らせている。墳丘は黒色粘土のベース上に約0.2mの盛土(黒褐色粘土)をして築造している。周溝内の埋土は6層に分けられ、その堆積状況からみて、周溝は徐々に埋まっていたものと思われる。

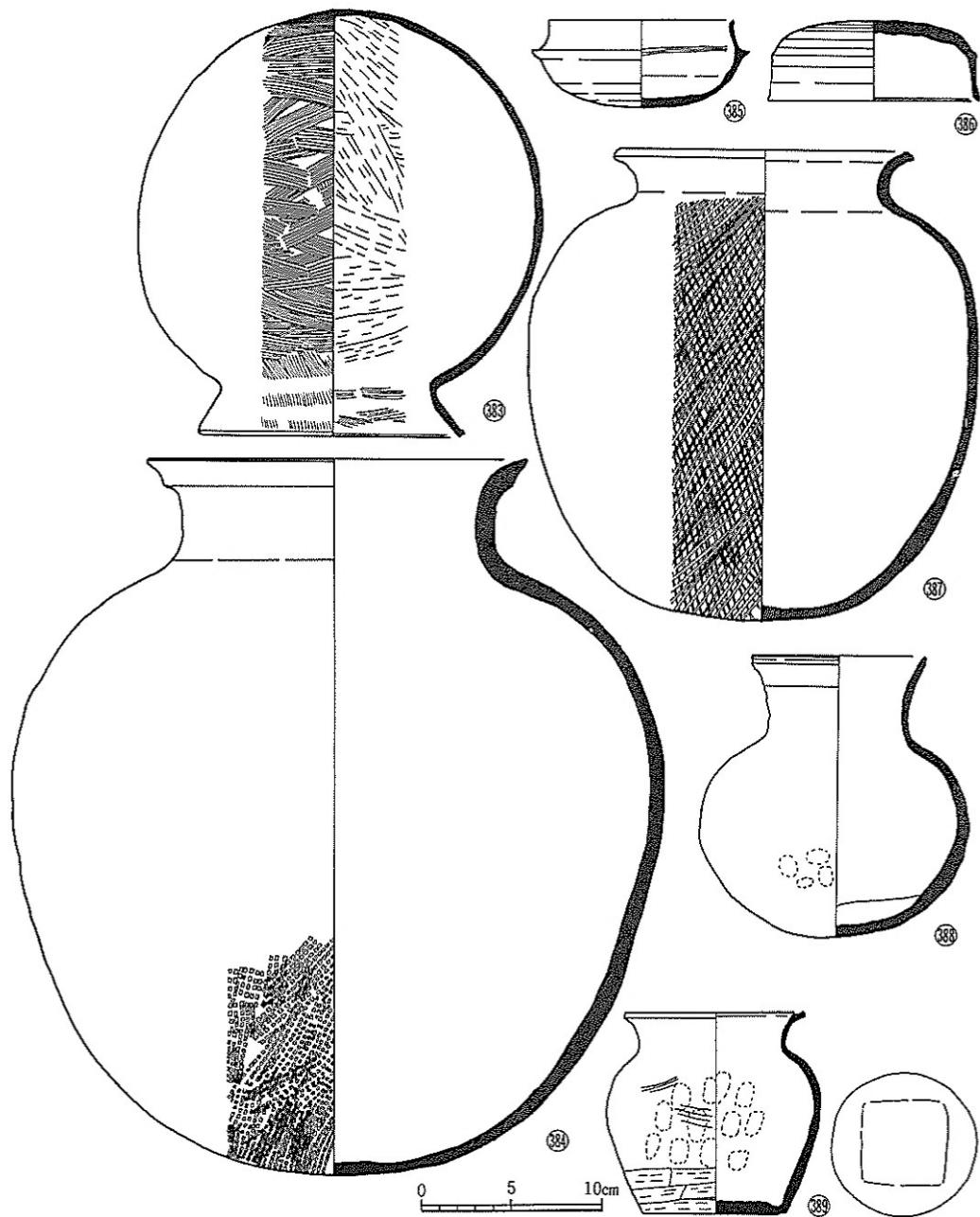
主体部は墳丘中央部分に1基検出した。土器棺である。須恵器の甕を棺



第138図 城山5号墳平面図・主体部位置図



第139図 城山5号墳主体部平面図・断面図



第140図 城山5号主体部土器棺・墓塚内・周溝出土遺物、城山6号墳周溝出土遺物

身とし、土師器甕を棺蓋に転用しており、これらを合わせ口状にし横に寝かせた状態で検出された。土器棺の主軸は墳丘の主軸からやや西へ振れており、N—35°—Wを示している。棺身の須恵器甕（384）は口径21cm、器高40cmで、口縁部の立ち上がりは比較的短く、直立しその後外反してすぐ終る。口縁端部は外面が少し上下に肥厚し、横ナデのためにつまみ出したように凹みを有する。そのため端部外面下端にわずかに稜を持つ。体部は胴張りの橢円形状を呈し、最大径は中位よりやや上にある。体部下半外面に格子状タタキを施している。土師器甕（383）は口径14.9cm

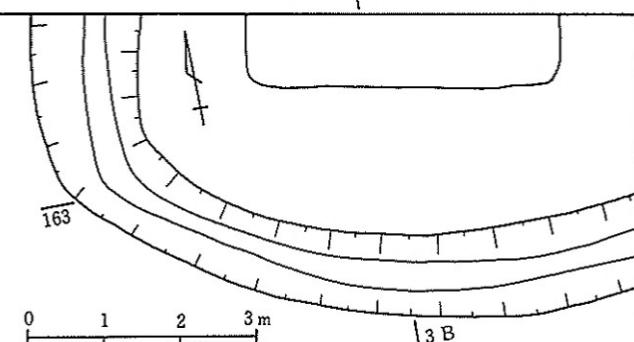
器高23.9cmで口縁の立ち上がりは比較的短く、まっすぐに外上方へのびる。口縁端部外面上端を軽く外側へつまみ出している。体部は球形に近く、最大径は中位付近にある。外面を刷毛調整、内面はヘラ削りを施す。土器棺の被葬者は乳幼児と思われ、蓋の位置から見て頭位を南東側にして埋葬されたと思われる。

5号墳から検出された土器には、明らかに供獻土器と思われるもの(387、388)と、周溝付近から出土し供獻土器の可能性のあるもの(385、386)がある。(387)は韓式土器の甕で口径16.4cm、器高26.3cmを測る。口縁部の立ち上がりは短く、外反して終る。端部外面に平坦な面を持つ。体部は胴張りの橢円形で、体部外面に斜格子状タタキを施す。内面はヘラ削りによる。土器棺の足側に立てられた状態で検出された。(388)は長頸壺で口径9.6cm、器高15.8cmを測る。口縁は外反気味に上方へ立ち上がり、端部は上方へつまみ出している。体部は球形で、全体的にナデ調整を施す。周溝内出土である。(385、386)は須恵器蓋坏の身と蓋であり、南西周溝の外側で検出された。

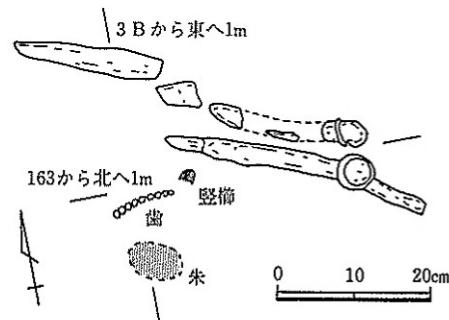
(387)の他に(384、388)は韓式土器の可能性がある。

城山5号墳の築造時期は古墳時代中期末に比定できるものと考える。

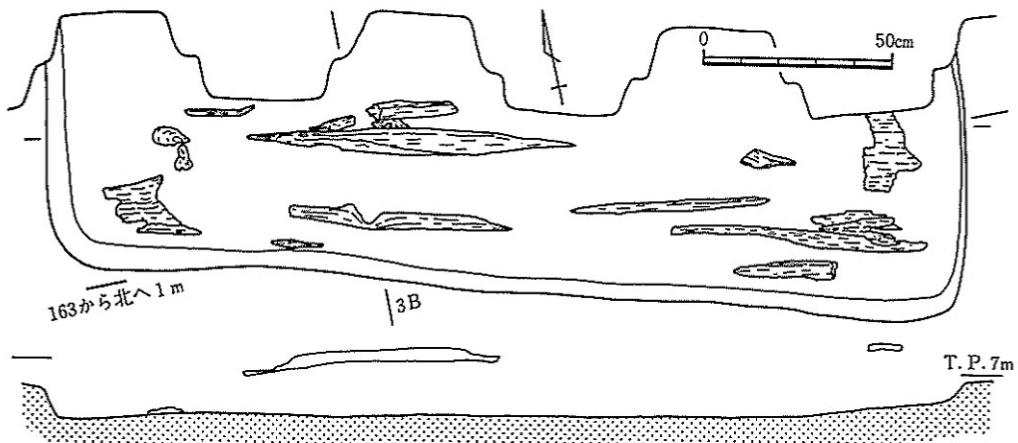
(城山6号墳) Cトレンチの切り抜げ部C—gトレンチの北端部、3A～3B、162～163の地区で検出された方墳である。西周溝の南端部及び南周溝、墳丘の裾部を一部検出したのみで、他は調査区外にある。南西コーナーを検出したので方墳と思われるが規模は不明である。周溝は幅1m



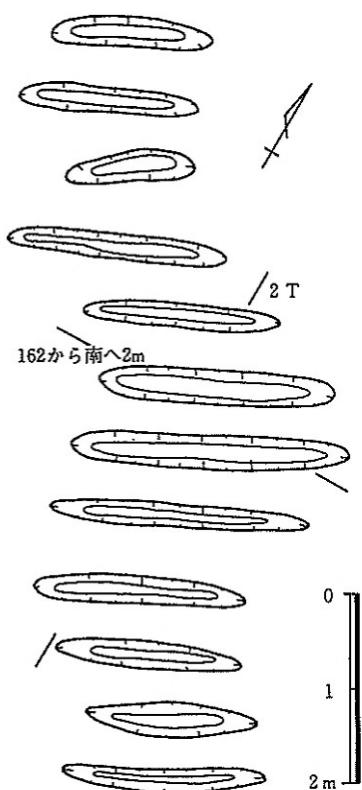
第141図 城山6号墳平面図・主体部位置図



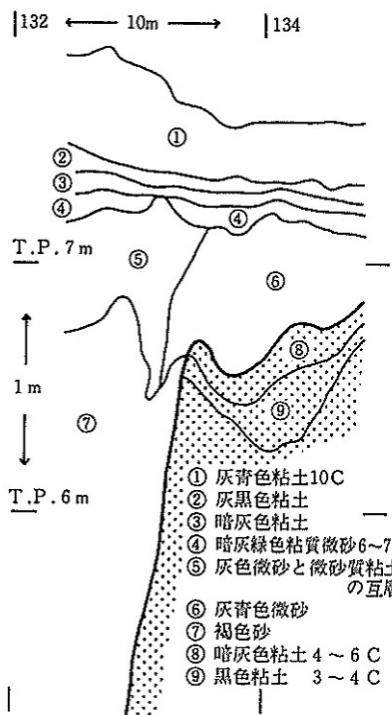
第142図 城山6号墳主体部内副葬品出土状況図



第143図 城山6号墳主体部平面図・断面図



第144図 溝状遺構平面図



第145図 自然河川南肩東壁断面図

を測った。墳丘は黒色粘土のベース上に約0.2mの盛土をして築造している。周溝内の埋土は3層に分けられ、埋土の状況からみて、周溝は徐々に埋まっていたものと思われる。墳頂端部から周溝底面までの高低差は0.5mを測った。墳丘の主軸はN-79°30'-Wを示している。

主体部は推定される中央部分より南側で1基検出された。墳丘と同じくN-79°30'-Wに主軸を持つ組み合せ式木棺の木棺直葬の主体部である。主体部の位置から見て、この他に中央ないしは北寄りにもう1基主体部を有する可能性が強い。

長さ2.44mを測ったが、小口幅は調査区外にのびているため不明である。木質は大部分腐蝕していたが、小口板、側板の極く一部が残存していた。

木棺内部には堅櫛、鉄製品などが副葬されており、人骨、人歯もわずかに検出された。人歯は木棺内の東寄りで検出され、付近で水銀朱も検出された。したがって被葬者は頭位を東にして埋葬されたものと思われる。水銀朱は堅櫛が検出された地点で見られ、したがって水銀朱は頭部に塗付されていたものと思われる。

鉄製品は腐蝕が著しく保存処理も不可能であったが、出土の際に確認したところでは、圭頭大刀1、環頭小刀1、小型鉄製品1である。これらは頭部の北側にならべられていた。圭頭大刀は最も北側に位置し、腐蝕が著しいうえに矢板打設の影響で変形していたが、刀身部42.5cm、柄頭部5cmの全長47.5cmを測った。環頭小刀は刀身部23cm、柄頭部は径4cmの環頭で、内部に文様帶を有するものと思われたが、腐蝕が著しく判明しなかった。

供獻土器は南周溝底面付近から鉢が1個体検出された(389)。ほぼ完形で口径10cm、器高11.3cmを測った。平底で体部下半はまっすぐ外上方に立ち上がり、体部上半で内弯する。口縁は外反しつつ短く立ち上がり、端部付近で更に外反して終る。体部下半外面に横方向のヘラ削りを施す。底部外面には四角形の器具の跡がみられる。形状、調整手法などからみて韓式土器と思われる。

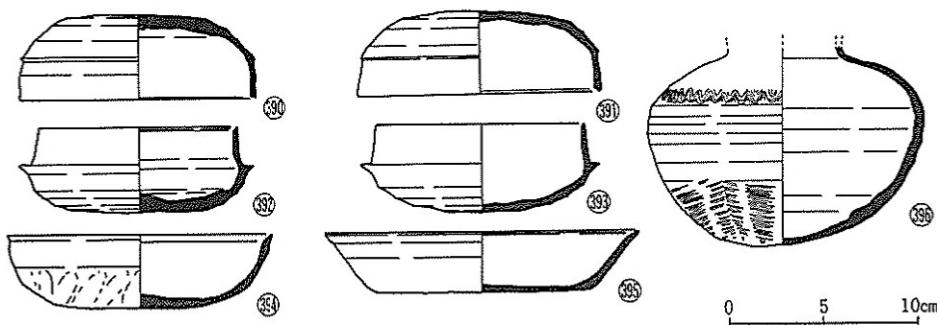
〈溝状遺構〉 城山5号墳の南西周溝の外側から城山6号墳

の南西部にかけての地区で、黒色粘土面で検出した。長さ1.5~3m、幅0.2m~0.3mで、北東から南西方向に掘られた溝状の遺構が、ほぼ0.5mの間隔で5号墳南西周溝に直行するように並んでいる。深さは0.2m~0.3mを測った。溝内埋土は暗灰色粘土であり、遺物は出土しなかった。性格は不明である。

〈自然河川〉 A Nトレーニチの南半部の、3B~3G、128~135の地区で検出された。川幅約10m、深さ約2.3mで、トレーニチを斜めに横切るかたちで南東から北西方向にゆるく蛇行しつつ流れていったと思われる。河川内の埋土は全て褐色粗砂である。内部から遺物は検出されなかった。トレーニチ東壁の断面によると、流れ始めの肩部は、北側が黒色粘土、南側は黒色粘土の上層の暗灰色粘土である。暗灰色粘土は、古墳時代中期頃、低い地点に部分的に堆積した土であり、この河川の流れ始めは古墳時代中期と思われる。又、河川が埋没した後で堆積した土層から出土した土器からみて、この河川は古墳時代後期前葉にすでに埋没していたものと思われる。

出土遺物（390~396）（390、391）は須恵器蓋坏の蓋で、口径12.5cm、器高4.5cmを測る。天井部は比較的丸味をおび、天井部と口縁部との境にみられる稜は鋭さを欠き、形だけのものになっている。天井部外面を回転ヘラ削り、その他は回転ナデと横ナデによる。（392、393）は須恵器蓋坏の身である。口径10.5cm~11cm、器高4.5cmを測った。受け部を有するもので、口縁の立ち上がりは比較的高く、やや内傾してのびる。端部は丸くおさめている。受け部は短く鋭さもみられない。底部外面を回転ヘラ削り、その他は回転ナデ、横ナデを施す。（394、395）は土師器で（394）は比較的平らな底部から口縁の立ち上がりが内彎気味に外上方に立ち上がる。端部は外方へつまみだしている。外面に指押さえの跡が強く残る。（395）は平坦な底部から口縁の立ち上がりが外上方へまっすぐのび端部で軽く外反して終る。端部は丸く收めている。器面の調整はナデによる。（396）は須恵器で、聰ないしは広口壺の体部の破片と思われる。体部外面下半に平行タタキが施されている。体部外面上半には波状文からなる文様帶を1帯配している。

これらの遺物は、自然河川が埋没した後に堆積した暗青灰色粘土から出土したものである。



第146図 自然河川埋没後堆積層出土遺物

第6節 飛鳥・奈良・平安時代

当調査区においては、弥生時代中期、古墳時代中期から後期までの遺構、遺物の豊富さに比べ、飛鳥時代から平安時代にかけては粘土層及び微砂層の厚い堆積がみられ、わずかに遺構、遺物は

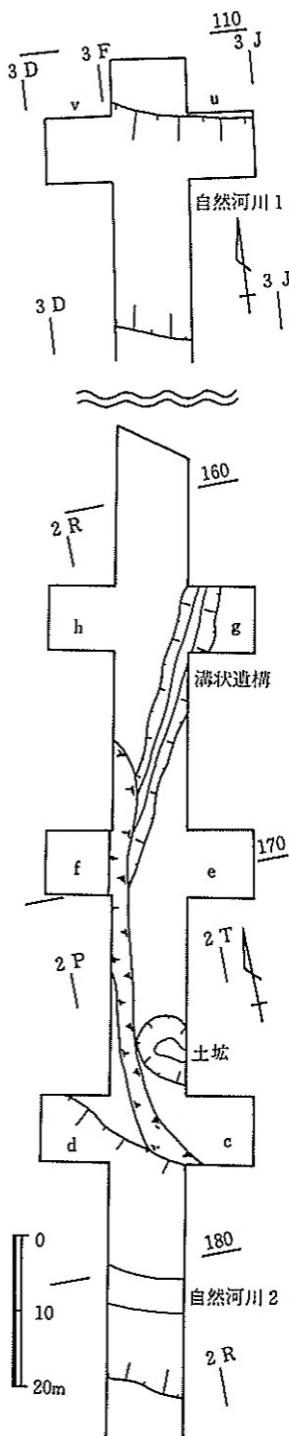
検出されてはいるが、不毛の時期であったといえる。

この時期の遺構は、古墳時代後期までが調査区の中央部付近であるCトレント北端部より北側に集中しているのに対し、Cトレント北端部より南側を中心に遺構がみられた。

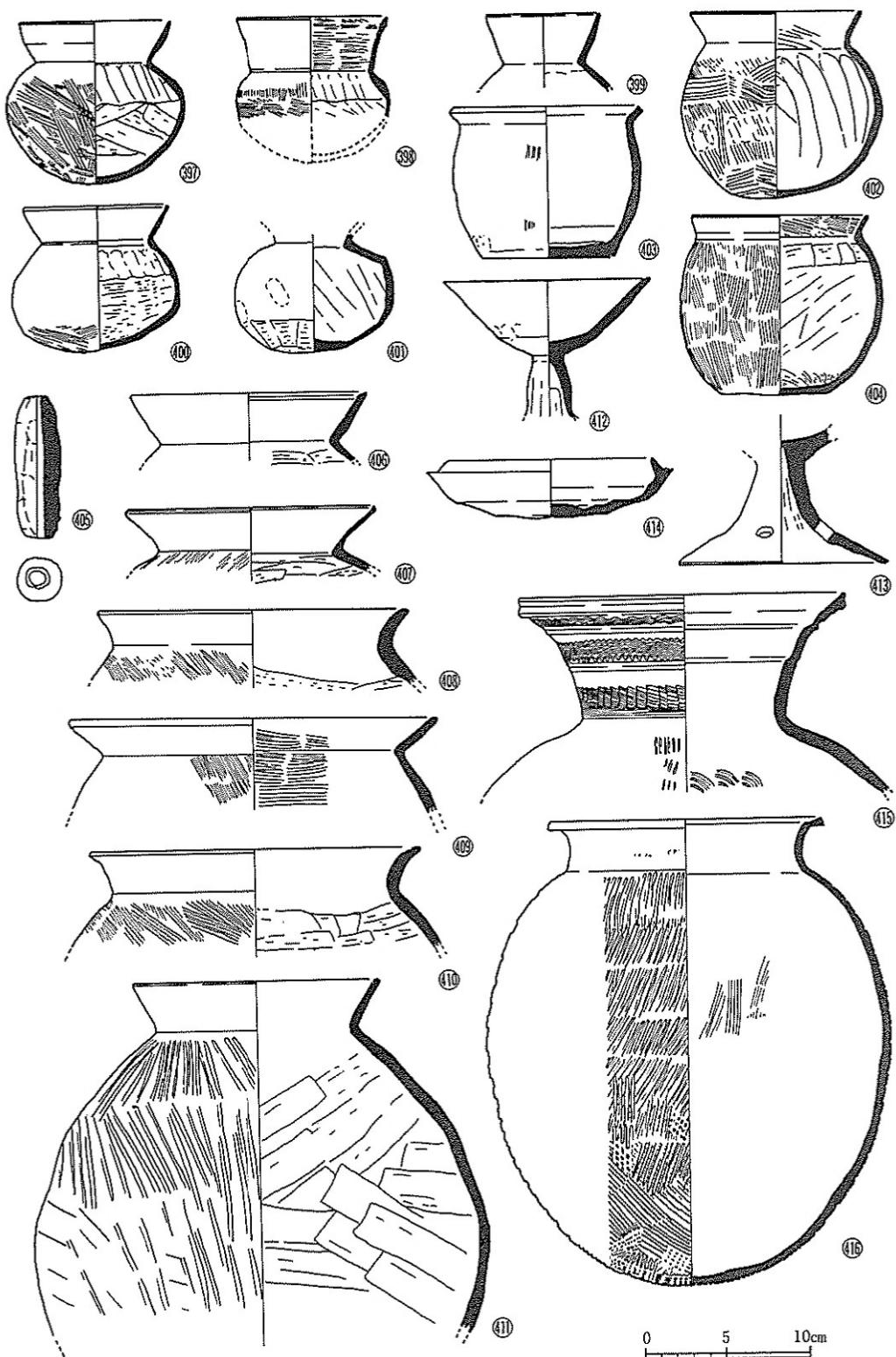
飛鳥時代の遺構としては暗灰青色粘土上面(T.P.+7.3m)で自然河川を、奈良時代の遺構としては暗灰色粘土ないしは暗灰色シルト質粘土上面(T.P.+7.4m~7.6m)で溝及び土塙を、平安時代の遺構としては青灰色粘土ないし灰色粘土上面(T.P.+7.8m)で足跡を検出した。

〈自然河川1〉 調査区の最北端部であるANトレント北端部で検出した。流れ始めの肩部は黒色粘土上面(T.P.+5.5m)であり、最終的な肩部は暗灰青色粘土上面(T.P.+7.3m)である。川幅約36m、川底までの深さ約4.8mを測った。河川内の埋土は褐色砂利である。自然河川1の上部において、南東から北西方向に流れる中、近世の自然河川が検出されており、この河川によって北側肩部及び河川内埋土の上半部が浸食されていた。河川内埋土及び、部分的に残っていた河川埋没後の堆積層からの出土遺物からみて、自然河川は古墳時代前期後半に流れ始め、飛鳥時代まで存在していたものと思われる。

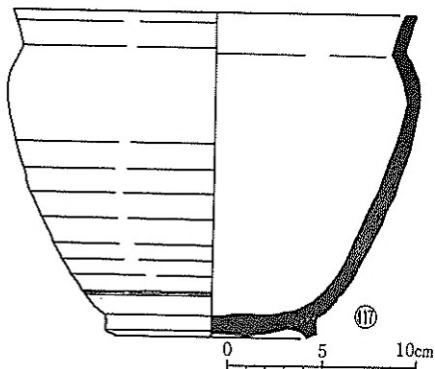
出土遺物(397~416)(397~401)は小型丸底壺である。口径7cm~9.2cm、体部最大径9.5cm~11cmを測った。すべて口径は体部最大径を凌駕しない。口縁部の高さは3cm前後で外反気味に立ち上がり、端部は丸く收める。体部は断面ソロバン玉形を呈し肉厚である。器面の調整は、体部外面を刷毛調整するもの(397, 398, 400)と、ヘラ削りするもの(401)とがある。体部内面はヘラ削りないしナデで、口縁部内面に刷毛調整を施すもの(399)がある。(402~404)は鉢である。そのうち(402)は土師器で、丸味を持った体部から口縁部が直線的に外上方へ立ち上がる。端部は丸く收めている。器面の調整は体部外面を荒い刷毛調整、内面は指ナデによる。口縁部内面にも刷毛調整を施している。口径10.3cm、器高11.3cmを測った。



第147図 飛鳥・奈良・
平安時代遺構略図



第148図 自然河川1出土遺物



第149図 自然河川1
埋没後堆積層出土遺物

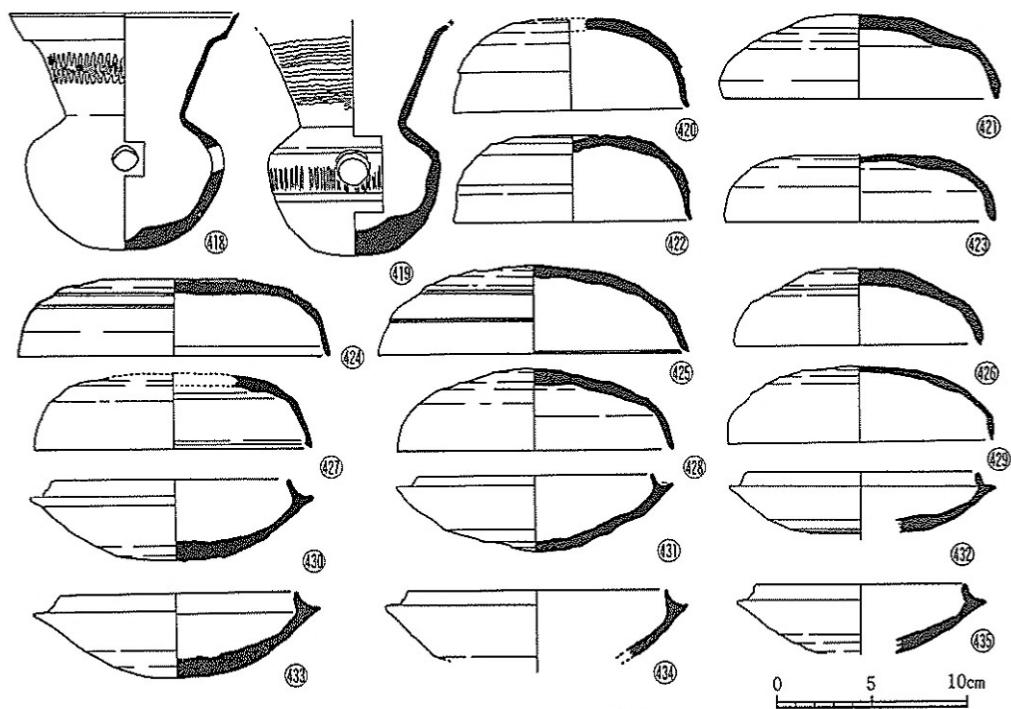
(403、404)はともに韓式土器の平底鉢と思われる。(403)は平らな底部と比較的丸味を持った体部からなり、口縁部は短く、外上方に立ち上がり終る。端部は外面に面を取っている。器面の調整は、体部外面は表面が剝離しており不明良であるが、指押さえの後で平行タタキを施しているものと思われる。底部と体部の接合部分にはヘラ削りを施している。内面はナデ調整である。底部外面にほぼ正方形形状を呈する棒状の器具の跡がみられる。口径11cm、器高9cmを測った。(404)は403)に近い形状を呈するが、底部の径がやや小さく、より丸味をおびた体部である。口縁

の立ち上がりは短く、外上方にのび、端部は丸く收めている。体部外面を刷毛調整、体部内面、底部内外面ともヘラ削りを施し、口縁部内面には刷毛調整を施す。口径10.6cm、器高10.8cmを測った。(405)は土錘で、長さ8.5cm、幅2.7cmで径1cmの孔を穿いている。(406~411)は土師器の甕で、(411)は口縁部から体部中位までの破片、その他はすべて口縁部のみの破片である。口縁の形状は様々で、直線的に外上方へのびるもの(406、407、409、411)、外反するもの(408、410)などがみられるが、口縁の立ち上りは全て短い。(412、413)は土師器の高壺である。(412)は壺部及び脚胴部の破片である。(413)は脚部のみで脚底部に3ヶ所円孔を有す。(414、415)は須恵器である。(414)は壺身で、受け部を有する。口縁の立ち上がりは短く内傾する。口径12.2cm、器高3.5cmを測った。(415)は甕の口縁部及び頸部付近の破片で、頸部外面に波状文を3帯配している。(416)は甕で、韓式土器と思われる。口径16cm、器高28cmで、橢円形の体部から口縁部が外反しつつ上方に立ち上がり、端部付近で水平に近く屈曲し終る。端部外面に面を取っている。体部外面を平行タタキしており、下半では部分的に格子状になっている。内面は刷毛調整を施している。

これらの遺物には自然河川内出土を示すように、ローリングを受け表面が磨耗しているものが多くみられる。

(417)は自然河川1が埋没した後で堆積した土層から出土した土器で、須恵器高台付鉢である。口縁の立ち上がりは短く、外上方に立ち上がり端部に至る。端部は軽く外方へつまみ出す。体部には張りがみられず、体部最大径はほぼ頸部付近にある。底部外面周縁付近に断面台形の貼り付け高台を有する。器面の調整は回転ナデ、横ナデによる。口径21.2cm、器高17.2cmを測った。

〈自然河川2〉 調査区の南端部付近であるCトレンチ南部で検出した。流れ始めの肩部は暗灰青色粘土上面(T.P.+6.8m)であると思われ、最終的な肩部は暗緑灰色粘土上面(T.P.+7.6m)である。川幅約30m、深さ約2.8mを測った。河川内の埋土は中層以下は褐色砂利であり、上層は砂に加えて粘土をブロック状に多く含んでいる。北側肩部は近世の自然河川によって浸蝕されている。河川内埋土及び、河川埋没後に堆積した層からは多くの遺物が検出された。これらからみて、自然河川2は古墳時代後期頃に流れ始め、飛鳥時代まで存在していたものと思われる。



第150図 自然河川2出土遺物

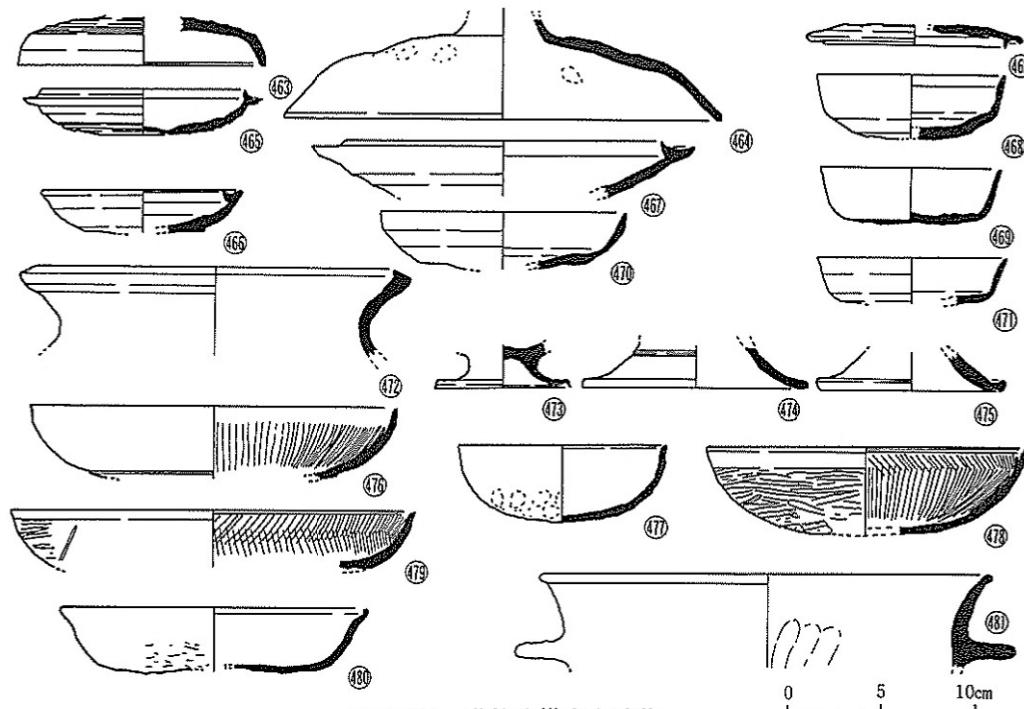
出土遺物（418～435、436～446）（418、419）は須恵器の頸である。（419）は口縁部を欠損しているが、ともに外反する口縁部が更に段をなして端部へのび、端部はつまみ出すものと思われる。最大径は口径にある。体部の形状は体部上半でやや張り出すもので、球形に近い。体部外面下半はヘラ削りし、その他は横ナデとナデによる。（418）は頸部外面に波状文を1帯配し、（419）は頸部外面に波状文を3帯、体部中位外面に刺突文を配する。いずれも、体部中位に1ヶ所径1.5cm内外の円孔を外側から穿いている。（420～429）は須恵器蓋壊の蓋である。天井部と口縁部の境にわずかながらも稜をもつもの（420、422）と天井部と口縁部の境がはっきりしないもの（421、423～429）とに分けられる。前者の方が古い形態であるが、全体的に丸味をおびており、稜は、その下側に沈線を巡らす事によって表現しており、鋭さに欠けるものである。天井部を回転ヘラ削りし、その他は回転ナデと横ナデによる。ともに同じ調整方法であるが、前者の方が削りの幅も狭く丁寧で、後者は全体的に雑な調整である。前者は口径12.4cm内外、器高5cm、後者は口径14～16cm、器高3.5～4.5cmを測った。（430～435）は須恵器蓋壊の身である。全て受け部を有するもので、口縁の立ち上がりは短く、内傾している。底部は丸味をおび、安定性に欠ける。器面の調整は底部外面の2分の1前後を回転ヘラ削りし、その他は回転ナデ、横ナデによる。口径11～14cm、器高4～4.5cmを測った。これらの壊身は（421、423～429）の壊蓋とセットになる壊身である。（436～438）は土師器蓋である。比較的短く、外反する口縁部で端部は丸く收めているが、内側に曲げ込むもの（436～437）とそうでないものがある。体部は球形に近く、口径は体部最大径を凌駕しない。体部外面の調整は刷毛調整であるが、内面はヘラ削りするもの

がる。端部は丸く收めている。底部外面周縁付近に貼り付け高台を有するもの（456、457）と高台が見られないもの（455）がある。器面の調整は底部外面を回転ヘラ削り、口縁部、高台貼り付け部を横ナデし、他は回転ナデによる。口径14cm～15cm、器高4cm内外を測った。（458～460）は土師器の坏身である。（458）は丸味を持った底部から口縁部が内弯しつつ立ち上がる。中位で指押さえによる凹みが見られる。端部は丸く收める。口径9.5cm、器高4cmを測った。調整はナデと指押さえによる。（459）は全体的に丸味を持った形状で肉厚である。口径8cm、器高3.5cmを測る。（460）は底部から内弯気味に外上方へのびる口縁部を有する。端部付近に横ナデのための凹みが軽く生じている。端部は丸く收めている。体部外面をヘラミガキ、底部外面はヘラ削りする。内面には三段にわたる左下がりの斜放射状暗文が施されており、見込み部には連弧状暗文が見られる。口径15cm、器高5.5cmを測った。（461）は土師質の土馬である。脚及び尾を欠損している。非常に写実的で鬚、鞍、面繫、手綱、尻繫なども、粘土紐を貼り付けたりつまみ出しにより表現している。土馬としては、極めて初期的な様相を呈しており、7世紀後半に比定されるものと思われる。

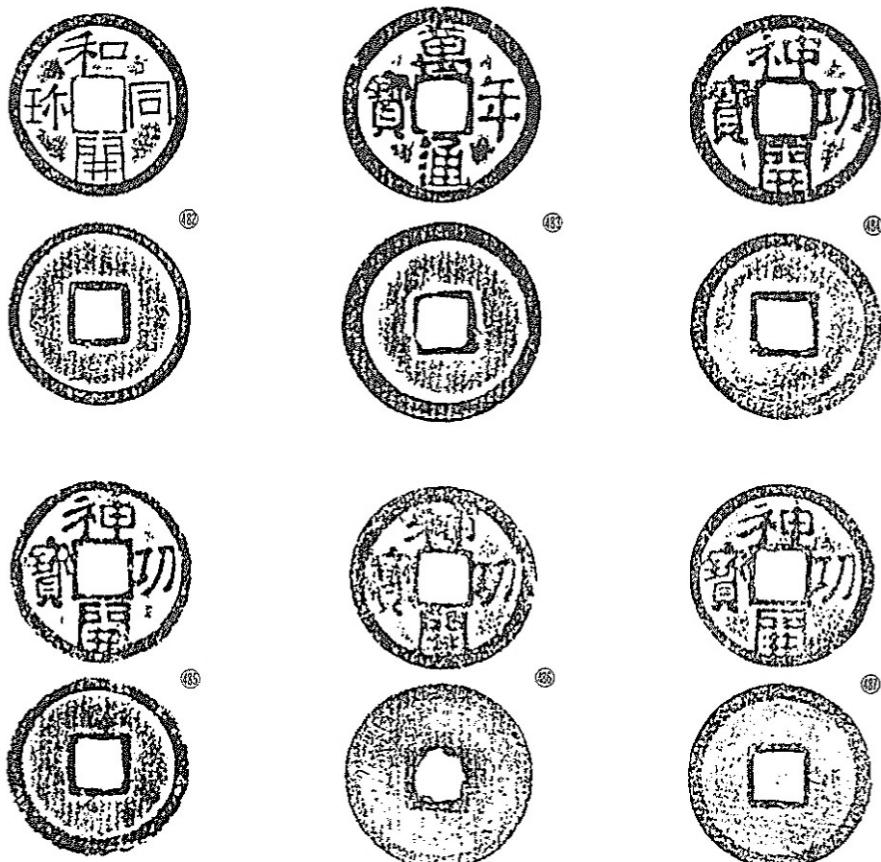
以上の遺物には多少時期的な幅がみられるが、7世紀中葉から後葉のものが多く、したがって自然河川2は7世紀後葉にはすでに埋没していたものと思われる。

〈溝状遺構〉 Cトレンチの北半部及び切り抜げ部C—gトレンチにかけての地区で検出した。北北東から南南西に走る溝状遺構である。幅約0.4m～0.5m、深さ約0.6mを測った。中世の溝によって切られている。溝内埋土より須恵器、土師器、銅錢などが検出された。奈良時代に属する遺構である。

出土遺物（462～481、482～487）（462、463）は須恵器蓋坏の蓋である。（462）はかえり



第153図 溝状遺構出土遺物



第154図 溝状遺構出土遺物

を有するタイプ、(463)はかえりを持たないもので、ともに蓋坏の蓋と身が逆転する前後ものである。(464)は須恵器で、口径23cmと大型の蓋である。天井部中央部分に径約3cmの環状のつまみを持つものと思われる。調整の際の指押さえのため器面に凸凹が多くみられる。天井部と口縁部の境付近で内側に屈曲し、いわゆる「くの字」状を呈している。端部は丸く收めている。蓋の蓋である。(466～471)は須恵器蓋坏の身である。そのうち(465～467)は受け部を有するタイプで(468～471)は受け部を持たないものである。(467)は口径20.2cmと非常に大型である。(473～475)は須恵器高坏で、脚部の破片である。底径7cm～12cmを測った。(474)には台形状の透し孔がみられる。(476)は土師器高坏の坏部である。坏底部と口縁部の接合部分に段を有する。内面に放射状暗文がみられる。(477、478、480)は土師器の坏身で、(477)は丸味をおびた底部から口縁部が内弯気味に外上方に立ち上り端部に至る。端部外面に横ナデによる凹みが生じている。器面の調整は指押さえとナデによる。(478)は比較的丸味をおびた底部から口縁部が内弯気味に外上方へ立ち上がる。端部内面に沈線を1条巡らす。口径17cm、器高4.5cmを測った。体部外面をヘラミガキ、底部外面はヘラ削り、内面はナデによる。口縁端部内面付近に右下がりの斜放射状暗文、見込みから体部にかけて放射状暗文がみられる。(480)は比較的平らな底部から口縁部が外上方に内弯気味に立ち上がり、端

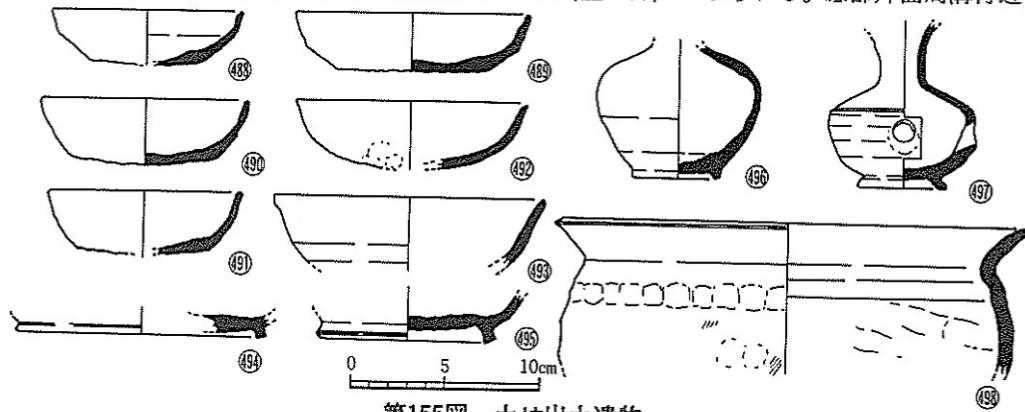
部付近で短く外反し終るもので、端部はつまみ出した後内側に折り込んでいる。体部外面下半をヘラ削り、その他はナデないし横ナデによる。見込み部分に暗文（連弧状？）がみられる。口径15.6cm、器高3.5cmを測った。(479)は土師器の皿である。平らな底部から口縁部が内弯気味に短く立ち上がる。端部は軽く外方につまみ出している。外面はヘラミガキ、内面はナデによる。口縁部付近内面に左下がりの斜放射状暗文を巡らし、更にそれと交差するようにすぐ下に右下がりの斜放射状暗文を巡らせている。口径21.4cm、器高3cmを測った。

銅銭（482～487）はいずれも皇朝十二銭の中にあるもので、(482)は和同開珎（初鋳年708年）、(483)は万年通宝（初鋳年760年）、(484～487)は神功開宝（初鋳年765年）である。どれも遺存状況は良好であるが、中でも和同開珎は良好で字体も全てはっきりしている。

これらの銅銭はいずれも極く近辺で検出されており、溝内に一括で投棄された可能性が強い。

〈土塙〉 Cトレーナーの中央部付近東壁寄りの、2R、173～174の地区で検出された。確認できたのは平面プランのうちの四分の一以下で、東側は調査区外にのびており、南半部は近世の自然河川によって浸蝕され消滅している。残存部で東西0.6m、南北0.5mを測った。深さ約0.9mを測った。底面付近から須恵器、土師器が出土した。

出土遺物（488～498）（488～490）は須恵器蓋環の身である。ヘラ切り未調整の底部で、口縁の立ち上がりは、中位で段を有するものと直線的なものがみられる。端部は丸く収めている。口径10cm～12cm、器高3cm内外のものである。(494、495)は須恵器蓋環の身であるが、底部外面周縁付近に貼り付け高台を有するものである。いずれも底部のみの破片である。(493)は土師器の坏身である。丸味を持った形状を呈しており、口縁端部を軽く外側へつまみ出している。(496)は須恵器長頸壺である。口縁部を欠損している。比較的平らな底部から体部が内弯気味に外上方にのび、体部上半で大きく内傾し、頸部にむかう。体部最大径は上半にある。体部外面下半を回転ヘラ削りし、その他は回転ナデないしナデによる。底部外面周縁付近に貼り付け高台を有する。底部径4.8cm、体部最大径8.6cmを測った。(497)は須恵器甌である。口縁部を欠損している。比較的平らな底部と丸味を持った体部からなり、ゆるく外反しつつ上方へのびる頸部が付く。体部の最大径は中位よりやや上方にあり、その位置に受け口状の円孔（注口部）がみられる。底部外面周縁付近に



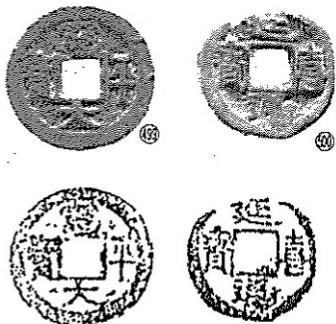
第155図 土塙出土遺物

「八の字」形の貼り付け高台を有する。底部径4.8cm、体部最大径8cm、円孔径1.2cmを測った。

(498)は土師器の甕で口縁部及び体部上位のみの破片である。口径24.8cmを測った。

以上の遺物は、7世紀中葉に比定されるものと8世紀後半に比定されるものに分かれるが、土塙の掘り込み面からみて、この土塙は8世紀後半に属する遺構であると思われる。

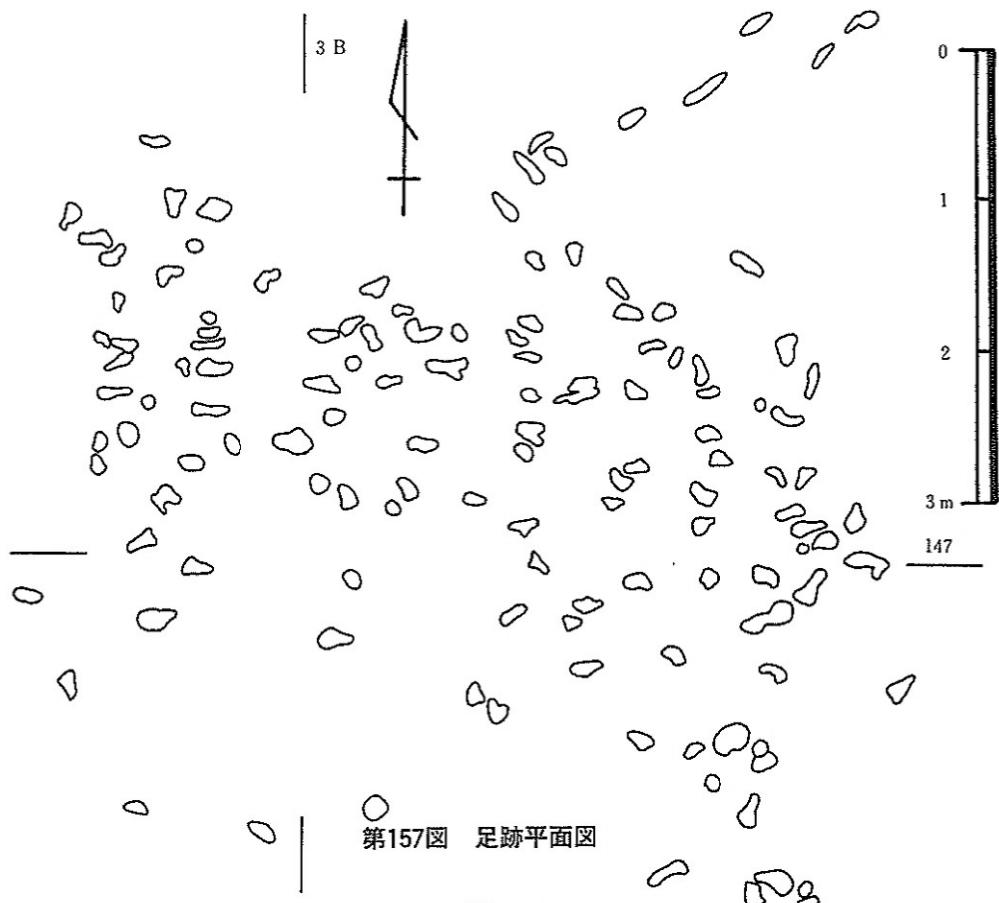
〈足跡〉 Aトレーナー南半部の3A～3B、146～147の地区及び、Bトレーナーの2T～3A、154～157の地区にわたって、青灰色粘土上面(T.P.+7.8m)で足跡を検出した。青灰色粘土のベースに褐色砂が埋まっていた。足跡は明らかに人間のものと思われるものと、その他に動物のもの



第156図 青灰色粘土層
出土遺物

と考えられるものもみられた。足跡には一定の方向性はみられず、人と動物が歩き回っている感じである。青灰色粘土上面においては畦畔などの水田遺構は検出されなかったが、花粉分析、種子などから、この面が水田であった可能性が強い結果が出た。

青灰色粘土からは、黒色土器片や、寛平大宝(499、初鋸年890年)、延喜通宝(500、初鋸年907年)などが出土しており、青灰色粘土は9世紀から10世紀頃にかけて堆積した土層と考えられ、青灰色粘土上面の水田は平安時代後期のものと思われる。



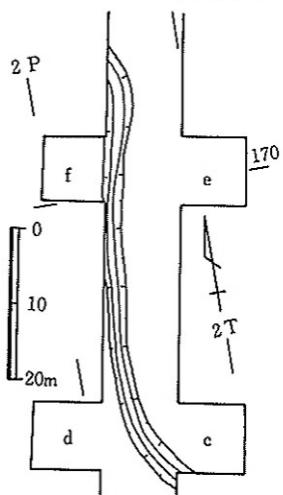
第157図 足跡平面図

第7節 中・近世

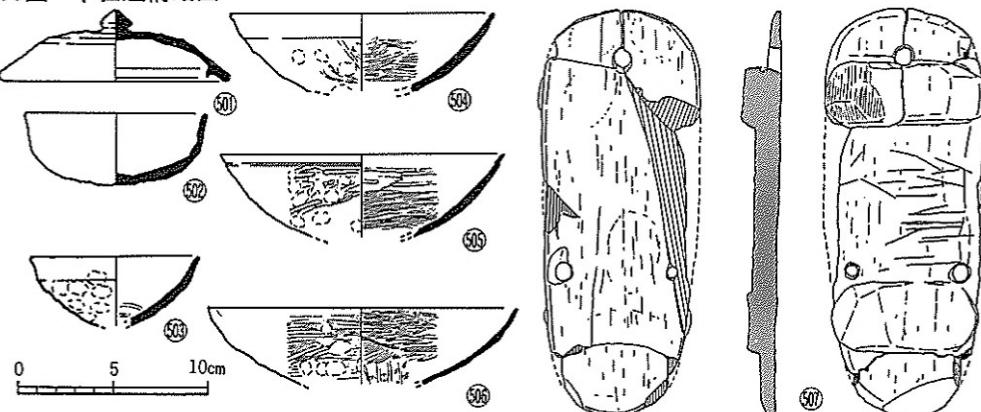
断面からみて、調査区付近では中世、近世に至っても、平安時代後期から引き続いて水田地帯となっていたものと思われるが、調査区では、中世の遺構としては灰褐色粘質土上面(T.P+8m)で溝状遺構を検出したのみである。又、溝のベースである灰褐色粘質土と対応する層から自然河川の肩部を確認した。この河川は1704年の大和川付け替え以後に埋没したとされる東除川で、これが調査区東側に添うように、あるいは横断して流れ続けており、氾濫を繰り返していたものと思われ、砂層ないし砂質土が厚く堆積している。しかしその間にも耕作は試みられていたようで、部分的ではあるがマンガン粒を含む粘質土層もみられ、護岸杭列、取水施設なども検出されている。

〈溝状遺構〉 Cトレーナーの中央部、2Q-176の地区で東壁部付近から北西方向へ走り、2Q-174付近で西壁に添って北へ流れ、2R-167付近で西壁の外へ出る溝状遺構である。幅約3m、深さ約1mを測った。検出部分のうちの南端部は近世の自然河川によって浸蝕されている。溝状遺構内から土器は検出されなかったので明確な時期比定はできなかったが、付近から土器が出土しており、それからみて溝状遺構は14世紀後半頃のものとみてさしつかえないと思われる。

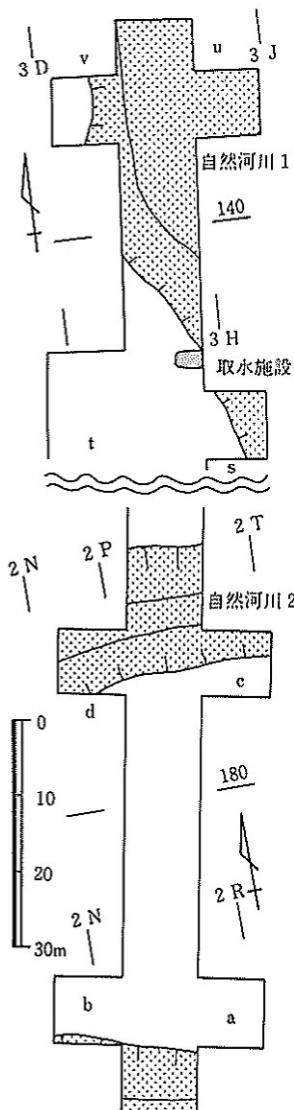
出土遺物(501～507)(501)は須恵器蓋壺の蓋で、天井部中央に宝珠つまみを有する。(502)は須恵器蓋壺の身である。これらの遺物は溝状遺構が自然河川の浸蝕をうけている付近からの出土であり、流れ込みとみてよい。(503～506)は瓦器の椀である。いずれも底部を欠損している。そのうち(503)は口径9cmと小型で、全体的に丸味を持つものである。口縁端部外面に横ナデのため段を生じている。内面見込みの部分に同心円状暗文がみられる。(504～506)は口



第158図 中世遺構略図



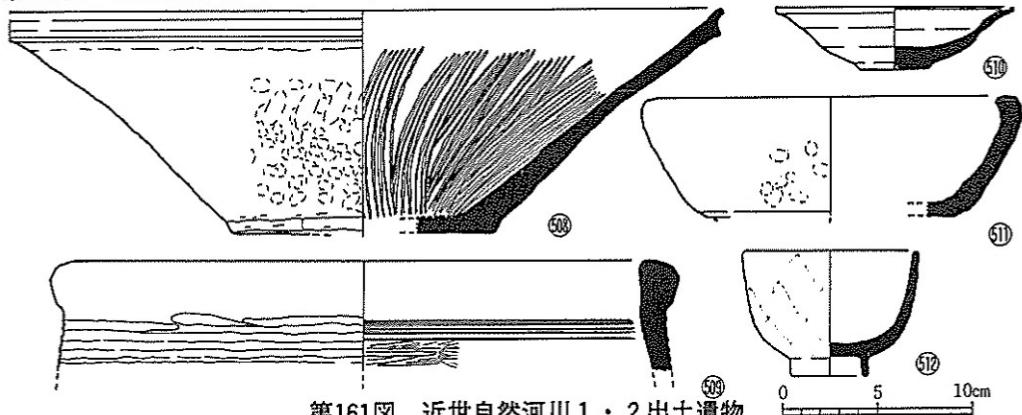
第159図 中世溝出土遺物



第160図 近世遺構略図

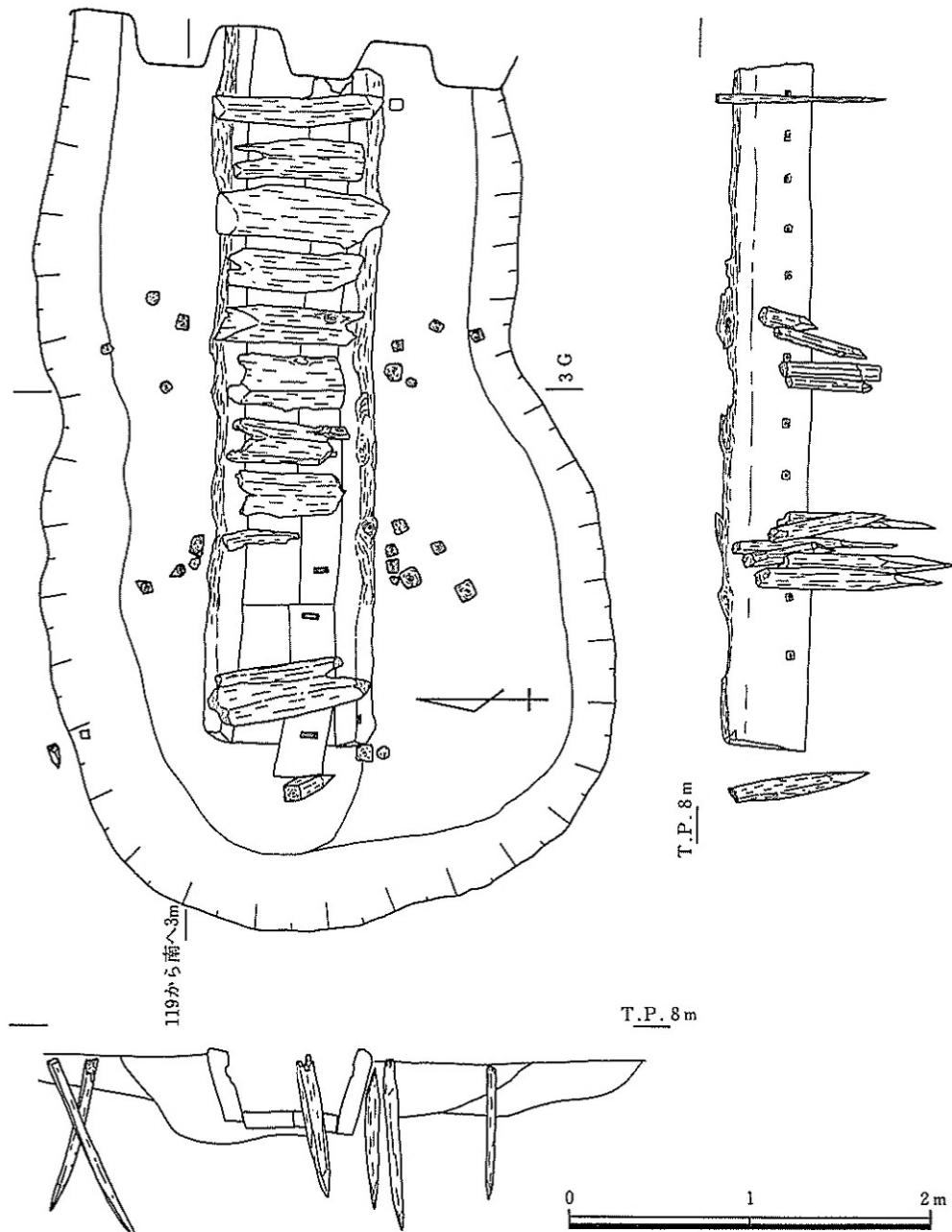
径14cm～16cm、器高4cm～5cm程のもので、体部外面を荒いヘラミガキ、内面は密なヘラミガキを施している。(506)には内面見込み部に三方向からなる斜格子状の暗文がみられる。(507)は木製下駄である。相当使用されたものらしく磨耗が著しい。長さ22cm、幅8.5cmを測った。長楕円形状を呈するが、後ろの方が磨耗の度合が大きい。又、幅3cmの羽が前後に2枚みられるが、これも後ろ側がより磨耗しており、使用者が後ろに重心をかけて歩行していたものと考えられる。上表面に使用による凹みがみられ、これらからみてこの下駄は右足に履かれていたものと思われる。前側に1ヶ所、後ろ側に2ヶ所、鼻緒を結ぶための円孔がみられる。外側よりも内側の磨耗が激しい事や、下駄の大きさなどからみて、女性用のものと思われる。

〈自然河川1〉 1704年の大和川付け替えの際に埋没した東除川の本流であると思われる。当調査区では2ヶ所で検出された。南端部を東から西へ横切っており、南端部で河川の北肩を検出した。その後東除川はほぼ直角に折れて調査区の東側を北流し、調査区の北端付近で再び北西方方向に折れて、ANトレンチの北端部を東壁から北壁に斜めに横切って、亀井31トレンチにぬけている。ANトレンチでは河川の西肩を検出した。流れ始めの肩は14世紀後半の相当層である灰褐色砂質粘土であり、埋没時の肩は盛土直下でみられた。この間に堆積した土層は主として砂層及び砂質土層であり、東除川の氾濫が繰り返しあつた事を示している。調査区の層序によれば、近世の河川内埋土及びオーバーフローによって堆積した砂層、砂質土上には部分的に近代の耕作土がみられ、その上は約50cmの厚さで府道中央環状線施設の際の盛土がみられ、盛土直下から数多くの土塙などが掘り込まれている。これらの中には近代の農耕用井戸もみられ、



第161図 近世自然河川1・2出土遺物

近代には調査区のほぼ全域で農耕が営まれていたものと思われる。したがって、中央環状線施設の際には大規模な削平、整地が行われたものと思われる。調査区で検出したのは片側の肩のみであるため、川幅は不明である。深さは最深部で約3.8mを測った。河川埋土内より縄袖陶器（510）が出土した。口径12.4cm、器高3.3cmを測る。ロクロ水挽きで成形で底部に糸切り痕が



第162図 取水施設平面図・断面図

みられる。内面全体と外面体部上半に縁釉がかけられている。

〈取水施設〉 A Nトレーニングの北端部の、3F～3G、119の地区で検出した。幅約3m、長さ4.5m以上の大きな掘り方を有し、その中央部に幅約1m、長さ4m以上の木組みの樋管状の施設が検出された。この施設は長さ約0.8m～1.2m、幅0.3～0.4m、厚さ0.1mの板材を二列に並らべて底板とし、その外側に長さ約2m、幅約0.4m、厚さ0.1mの板材を外開きに斜めに立てかけ、外側から約5cm角のほどを切り鉄釘を打ち込んでいる。釘間は約0.3m～0.4mを測った。更に木組の外側に5cm～10cm角の杭を各所に打ち込んで補強している。天井板は幅0.2m～0.4mの板材を約0.1mの間隔をあけて並べているが、腐敗が著しく所々欠損していた。底板には所々に約5cm～10cmの長方形の孔がみられる。これらはいずれも板の厚味の2分の1付近まで止まっており貫通しているものはない。これらの孔は樋管のために穿かれたものではなく、板材が転用されたものである事を物語っており、これらの底板は船材を転用したものと思われる。

この取水施設は東除川に取り付けられており、農業用の用水を取り入れるために使用されたものと思われる。

〈自然河川2〉 Cトレーニングの中央部やや南寄りを東から西に横切って流れる自然河川である。川幅約15m、深さは最深部で約2mを測った。流れ始めの肩は盛土下第2層付近にある。肩となっている層からみて、この河川は近世に流れ始めたものである。又、肩部のある盛土下第2層は東除川のオーバーフローによって堆積した層の中にある、したがって自然河川2は近世の時期の東除川の支流であると思われ、その存在時期は近世の範囲である。1704年の大和川付け替えに伴なって東除川本流とともに埋没したものと考えられる。

出土遺物（508、509、511、512）（508）は擂り鉢である。平らな底部から体部が外上方へまっすぐ立ち上がり、中位でわずかに外反して口縁に至る。口縁端部の上流を軽くつまみ出しており、そのため稜をなす形状を呈している。体部下端付近をヘラ削りし、その他はナデによる。底部から体部にかけての内面に、7本単位の櫛描き条線を施し、擂り面としている。口径37.8cm、器高11.8cmを測った。（509）は甕の口縁部及び体部上端のみの破片である。口縁部は段状に肥厚している。口径29cmを測った。漆焼きである。（511）は鉢で、平らな底部から体部がわずかに内弯しつつ外上方へ立ち上がり口縁部に至る。口縁部は短く内傾して終る。口径17.2cmを測った。（512）は染付け磁器で湯呑み茶碗である。口径9.2cm、器高6.6cmを測った。伊万里焼きと思われる。

第5章 まとめ

ここに概要を報告した城山遺跡(その1)調査区の発掘調査は、近畿自道車道天理～吹田線建設に伴うもので、昭和58年2月から昭和60年10月に至る期間に実施したものである。遺物の基礎的な整理作業は、現地での発掘調査と併行して行い、調査終了後、本概要報告書作製の為の総括的な整理作業を実施した。ここでは発掘調査と整理作業を通して得られた成果を、時代別に概観し、まとめたい。

旧石器時代 羽曳野丘陵から続く洪積段丘は、河内台地と称される中位段丘を経て、徐々に下降し当該遺跡地に至る。今回の調査で、この段丘が急下降する段丘崖の縁辺部を捉える事が出来た。加えて、この段丘崖縁辺部に、原位置を保った石核や剝片が出土し、土塙が検出された。

丘陵上や中位段丘上での遺構の検出や石器の出土は言うに及ばないが、今回の様に沖積層によって厚く覆われた低位段丘、増してや段丘崖縁辺部に検出された事は特筆に値する。後期旧石器時代の活動圏が、丘陵上や中位段丘上に限定されたものではなく、広く低位段丘縁辺部にまで及んでいた事を明らかにするものである。

縄文時代～弥生時代前期 後期旧石器時代の石核や剝片を出土した白色粘土の直上に、付近の層的指標となる黒色粘土が堆積している。この黒色粘土は、調査区北方の段丘崖に従って急下降している様で、調査区北端最下層には検出されなかった。この北端最下層は、黒色粘土もしくは相当層を被覆する層で、上面から炭化物や貝殻に伴って縄文時代後期前葉一北白川上層式に比定される土器が出土した。従ってこの黒色粘土層は、縄文時代前期から中期に至る期間に堆積したものと考えられる。

又黒色粘土の直上層上面を切り込み面とする自然河川を検出したが、埋土から弥生時代前期に比定される砥石が出土した。黒色粘土の直上層が縄文時代中期から後期に至る期間に堆積し、後晩期に流れ始めた自然河川が、弥生時代前期古段階に埋没したものと想定している。

自然河川埋没後も弥生時代前期中段階から新段階を通じて安定した堆積が続く。新段階の遺構は、この堆積層上面に形成されたものであろう。弥生時代中期の方形周溝墓は、前期新段階の遺構を掘り崩し、築造されたものと考えられる。事実、方形周溝墓の盛土から前期新段階の土器が多く出土した。但し前期新段階の土器と共に方形周溝墓の盛土から出土した残存状態の良好な晩期の土器が、本来どの層に包含されていたか疑問の残るところであるが、出土量は少なく不確実な要素が強い。以上に想定した弥生時代前期以前の各層位の時期が、付近の調査によって追認又は変更される事を望むものである。

弥生時代中期 遺構面は中期初頭から後期初頭に至る間、層位の上下を看取する事が出来ず、同一面が維持されていた様である。Cトレンチ北半部からAトレンチ南端にかけて高台状になり、Cトレンチ北半部に、2基の方形周溝墓、1棟の住居址、3本の大溝を検出した。Cトレンチ南

半部は一段下降し、その2調査区Dトレンチに続く。遺溝・遺物共に全く検出されなかった。Aトレンチから北のANトレンチに向ってゆるやかに傾斜しているが、この斜面に40基にのぼる方形周溝墓が累々と検出された。

A・ANトレンチの方形周溝墓群の中で全容を明らかに出来た方形周溝墓は極くわずかで、その殆んどが調査区域外に位置する。実際kトレンチの東20mで実施された調査や、t・pトレンチの西20m^{注1)}で実施された調査でも方形周溝墓が確認されており、墓域の東西延長が100mをはるかに上回る事は確実である。又調査区内に検出した方形周溝墓群の北端は、飛鳥時代の自然河川によって断ち切られているが、当時はさらに北方へ連綿と続き、龜井遺跡に検出された方形周溝墓群^{注2)}と同一群を形成していた様である。従ってこの大方形周溝墓群は、少なくとも南北延長500m、東西延長100mを上回る範囲に位置し、最終的に数百基が頸在したものと考えられる。又所属する集団は龜井集落に居住し、集落の南側一帯を墓域としていた様である。

一方Cトレンチに2基の方形周溝墓、gトレンチに1棟の住居址を検出した。この住居址は、明らかに龜井集落と一線を画し、むしろ“城山集落”とでも呼称すべき居住域をもつ集団の存在を想起させるものである。又2基の方形周溝墓はこの集団に所属するもので、居住域、墓域共南東方向にひろがるものと考えられる。さらに3本の大溝は、集落間を区画するもの（溝1）、集落内で墓域と居住域を区画するもの（溝2・3）とも考えられるが、あくまでも推定の域を脱し得ず、今後の調査で明らかにされる事を期待する。

翻ってA・ANトレンチの方形周溝墓群を概観してみれば、16号・17号方形周溝墓付近を中心として北群と南群に分類される様な特徴をそれぞれが有する。北群は、大きな規模をもち、周溝によって整然と区画される。出土した供献土器は多数で時期差をもち、主体部や土器棺は数次に渡って埋葬されている。又盛土下には土器を伴った溝が検出され、一時期古い方形周溝墓の存在が暗示される。南群は、低い封土で小規模な周溝墓が密集し、方位も一定しない。供献土器は少なく、墳丘規模から主体部は単独埋葬と考えられ、土器棺も2基を越えるものはない。

とりわけ北群の盛土下に検出した溝は、Ⅱ様式から始まる方形周溝墓の築造が、時期によって墓域を漸次移動させた可能性を否定するものである。むしろ以下の様な形成過程の下に墓域が維持されたものではなかろうか。

第Ⅰ期 築造が開始されしばらくの間は、墓域に点々と散在する。低い封土で規模は小さく殆んど単独で埋葬される。Ⅱ様式からⅢ様式中段階に相当する。

第Ⅱ期 築造が進展するに従い、すでに散在している方形周溝墓の空白地をうめていく。次第に密集する為、方位や形狀が一定しなくなる。小規模から中規模のもので、単独埋葬が続く。Ⅲ様式中段階からⅢ様式新段階に相当し、南群にこの状況が残存している。この時期には別に集落が営なまれ、そこに居住する集団が周溝墓を築造する。Cトレンチ遺構群に相当する。

第Ⅲ期 墓域全域に渡り周溝墓が築造されつくし、空白地がなくなる。すでに在る周溝墓の内集落から程遠からぬ位置のものを取り込み、さらに盛土し、より大規模な方形周溝墓に築造しな

おす。現存する北群がこの状況を示し、Ⅲ様式新段階からⅣ様式に相当する。

この様にして最終的に顕在した様相が、今回検出したA・ANトレンチ方形周溝墓群とCトレンチ遺構群ではなかろうか。但しこれはあくまで仮定に基づく推論に過ぎず、より科学的な根拠を付与するには、付近の詳細な検討と資料の増加を待ち、これに依拠しなければならず、今後の課題とするところである。

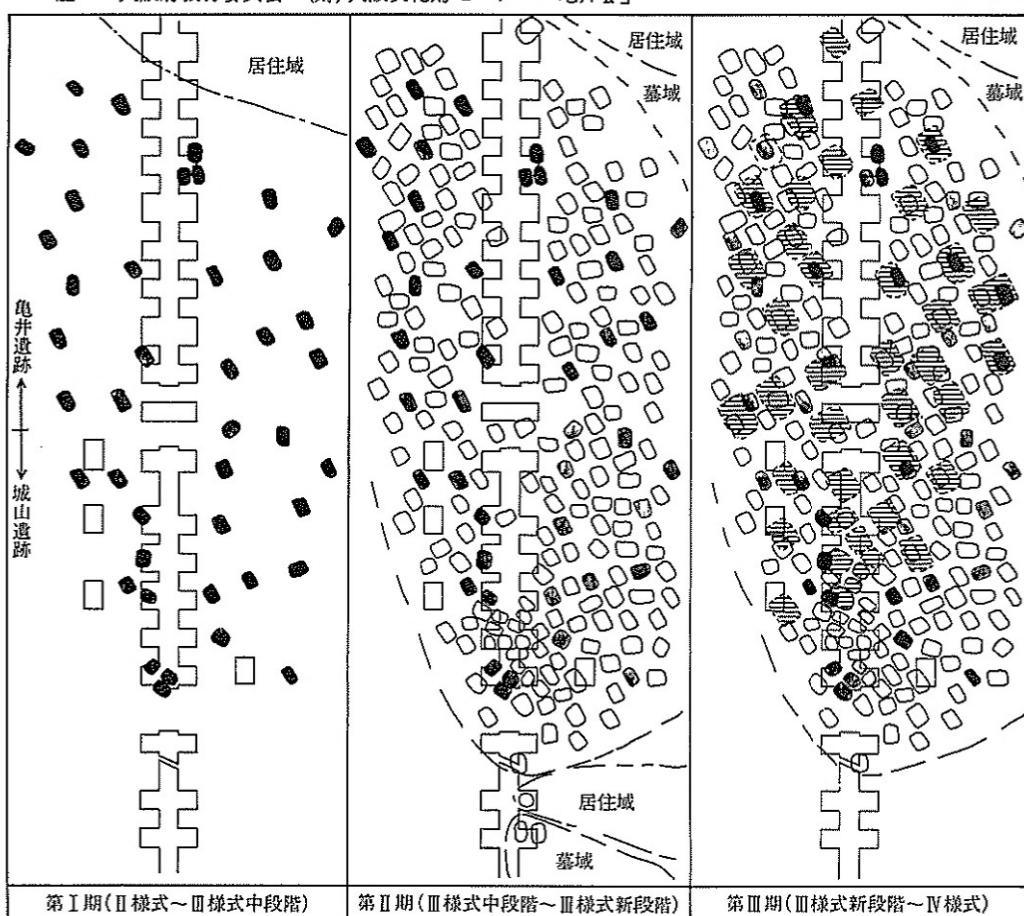
方形周溝墓群から出土した土器は、コンテナ100杯に及ぶ。その内復元、実測の可能なものについては全て掲載した。所謂生駒西麓産の土器も多数出土し、数基の土器棺にも使用されていた。19号・7号方形周溝墓の様に半数以上が生駒西麓産の土器によって占められるものもある。この他にも明らかに他地域から搬入されたと思われる土器もあるが、破片をも含めた総ての土器について検討する余裕を持てなかった。しかし掲載した土器は、供献されたであろう全ての土器の指標となる事は確かで、良好な資料が得られたものと考える。土器研究に供されん事を願うものである。

注1 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「亀井・城山」昭和55年12月

注2 (財)大阪市文化財協会、下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG 84-34) 略報・積山 洋氏の御教示を得た。

注3 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「亀井Ⅱ」

(杉本)



第163図 方形周溝墓築造時期別想定略図

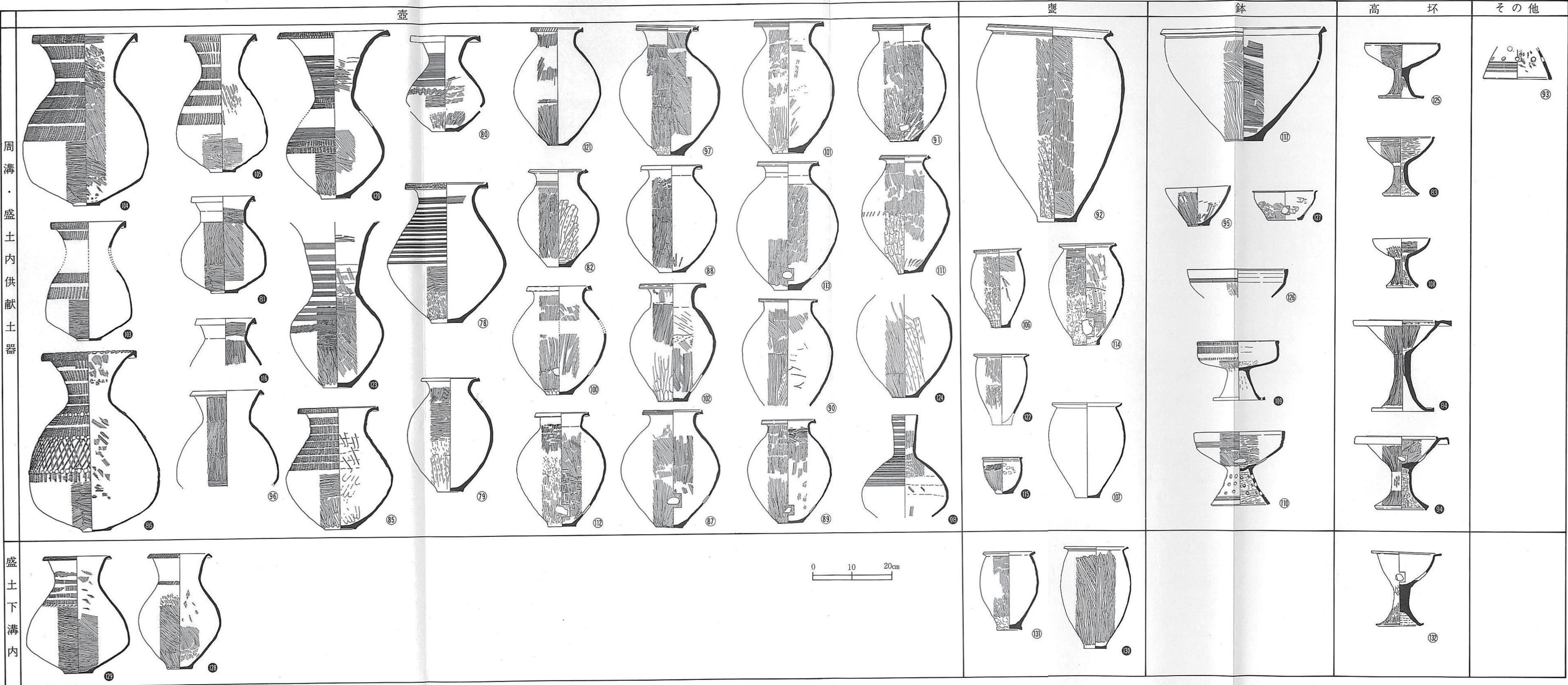
方形周溝墓	位 置	規 模 (m)		陸橋部	方 位	主体部	土器棺	供獻土器 ()内は生駒西麓産					
		長軸×短軸	高さ					壺	甕	鉢	高杯	その他	総数
24号	3 F-118	? × 10	0.9					1					1
27号	3 D-119							1(1)					1(1)
22号	3 G-120	13 × 9	1		N-50°-E			3(2)			1		4(2)
31号	3 I-121		0.7								1		1
33号	3 I-123												
21号	3 I ~ 3 H-122	12 × 9	1	有	N-60°-W								
23号	3 C ~ 3 F-120~123	17 × 14	1.5	有	N-55°-E	5基	7基	31(12)	7(2)	7(3)	6(4)	1	51(21)
20号	3 F-124	18 × 15	1.3	有	N-30°-W								
28号	3 C-125				N-35°-W								
34号	3 G-125	8.5 × 8	1.1	有	N-15°-W								
35号	3 H-129				N-15°-W								
19号	3 C ~ 3 F-125~129	16 × 14	1.6	有	N-35°-W	2基	6基	10(8)	3(2)	1(1)	1	2(2)	17(13)
18号	3 F-129~130	7 × 7	1.7	有	N-35°-W								
32号	3 D-129												
26号	3 E-132	16 × ?			N-45°-W								
29号	3 B-132	? × 10	1.7	有	N-45°-W		2基	3(2)	3(2)				6(4)
17号	3 C ~ 3 E-132~135	16 × 14	1.8	有	N-45°-W	5基	5基	28(12)	10(4)	1(1)	2(2)	2(1)	50(20)
30号	3 B-135				N-55°-W								
16号	3 E ~ 3 G-134~136	? × 8	1		N-45°-W	1基		5	2	2			9
1号	3 C ~ 3 E-136~138	9 × 8	1		N-30°-W		1基				1	1	
2号	3 B ~ 3 C-138~139												
3号	3 E-139		1		N-35°-W			1	1(1)	1	1	4(1)	
4号	3 C ~ 3 E-139~141	14 × 9	1.4		N-45°-W		2基	1	1	1	1	1	4
15号	3 C-141				N-30°-E								
38号	3 F-142		0.9	有									
39号	3 F-144		0.9										
6号	3 D ~ 3 E-142~144	11 × 9	0.9	有	N-10°-E	1基		2	1(1)	1	1(1)	5(2)	
5号	3 B ~ 3 D-142~144	11 × 10	1.1		N-S			1	1(1)		1	3(1)	
40号	3 C ~ 3 B-141~143	10 × 7	0.8	有	N-S					1		1	
7号	3 C ~ 3 D-144~146	? × 10	1	有	E-W		2基	1(1)	3(2)	1(1)	1(1)	6(5)	
9号	3 B-144~145				E-W								
10号	3 B-145~146				N-45°-E								
8号	3 B ~ 3 D-146~148	9 × 9			N-45°-E		1基	1(1)				1(1)	
42号	3 E-150												
41号	3 D-149~150				N-45°-E				1			1	
11号	3 B ~ 3 C-148~149	7.5 × 6.5		有	N-45°-W								
12号	2 T ~ 3 C-149~151				N-45°-W				2(1)			2(1)	
36号	2 T ~ 3 B-147~149				N-45°-W				1(1)			1(1)	
37号	2 T-148~149				N-45°-W								
13号	3 A ~ 3 B-156~158		1		N-10°-E								
14号	2 S ~ 2 T-167~170	13 × 8	0.6		N-10°-E				3(2)	1		4(2)	
25号	3 A-170				N-10°-E								

(供獻土器は復元・実測したものに限る)

表1 方形周溝墓詳細一覧表

方形周溝墓	主 体 部				土器棺 ()の器種は生駒麓産
	号数	構 造	方 位	人骨	
23号	1号	組み合わせ式木棺	N-55°-E	有	11号 壺 垂直
	2号	〃	〃	不明	12号 甕 鉢 N-30°-E
	3号	〃	N-35°-W	有	13号 甕 壺 垂直
	4号	〃	N-55°-E	有	14号 甕 N-20°-E
	5号	不 明	〃	不明	15号 (甕) (壺) N-15°-W
19号	1号	組み合わせ式木棺	N-60°-E	有	16号 鉢 鉢 N-15°-W
	2号	不 明	〃	不明	24号 甕 鉢 N-20°-W
	3号	組み合わせ式木棺	N-65°-E		
	4号	不 明	〃	不明	
	5号	組み合わせ式木棺	N-35°-W		
29号	1号	組み合わせ式木棺	N-50°-E		19号 甕 鉢 N-50°-E
	2号	組み合わせ式木棺	S-10°-W		23号 (甕) 鉢
	3号	組み合わせ式木棺	N-45°-E		
	4号	組み合わせ式木棺	N-25°-E		
	5号	組み合わせ式木棺	N-60°-E		
17号	1号	組み合わせ式木棺	N-45°-E	不明	7号 甕 水差1 N-85°-E
	2号	不 明	〃	不明	8号 (甕) N-25°-E
	3号	組み合わせ式木棺	N-55°-E	有	20号 甕 鉢 N-60°-E
	4号	〃	N-50°-E	有	21号 (壺) (鉢) 垂直
	5号	〃	N-55°-E	不明	22号 甕 S-35°-E
16号	1号	不 明	N-45°-E	不明	
	2号	不 明	N-45°-E	不明	
	3号	不 明	N-45°-E	不明	
	4号	不 明	N-45°-E	不明	
	5号	不 明	N-45°-E	不明	
4号	1号	組み合わせ式木棺	S-40°-W		1号 (甕) (鉢) S-40°-W
	2号	組み合わせ式木棺	N-40°-E		2号 (甕) (鉢) N-40°-E
	3号	組み合わせ式木棺	N-75°-E	不明	
	4号	組み合わせ式木棺	N-75°-E	不明	
	5号	組み合わせ式木棺	N-75°-E	不明	
7号	1号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		3号 壺 N-70°-E
	2号	組み合わせ式木棺	S-25°-W		4号 (甕) 鉢 S-25°-W
	3号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		
	4号	組み合わせ式木棺	S-25°-W		
	5号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		
8号	1号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		
	2号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		
	3号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		
	4号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		
	5号	組み合わせ式木棺	N-70°-E		

表2 方形周溝墓埋葬施設詳細一覧表



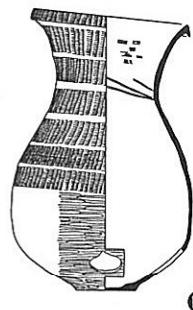
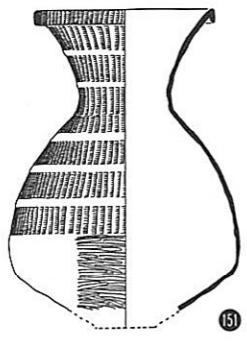
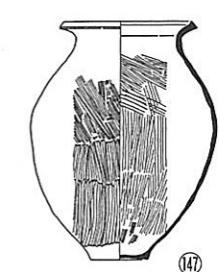
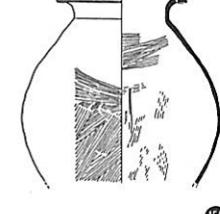
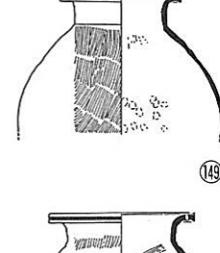
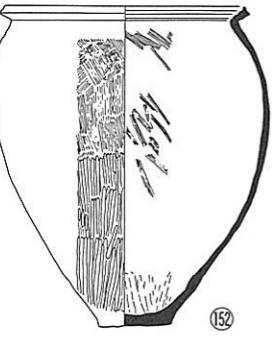
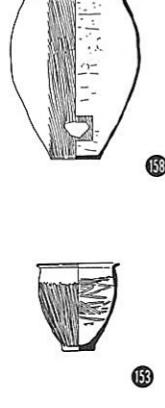
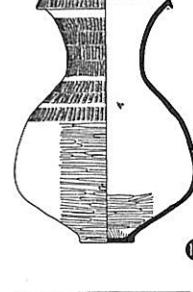
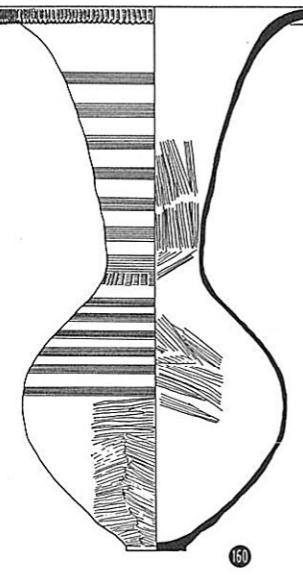
	壺	甕	鉢	高 坯	その 他
周溝・盛土内供献土器	  	   	 	 	
盛土下溝内					

表 4 . 19号方形周溝墓供献土器一覧表

0 10 20cm

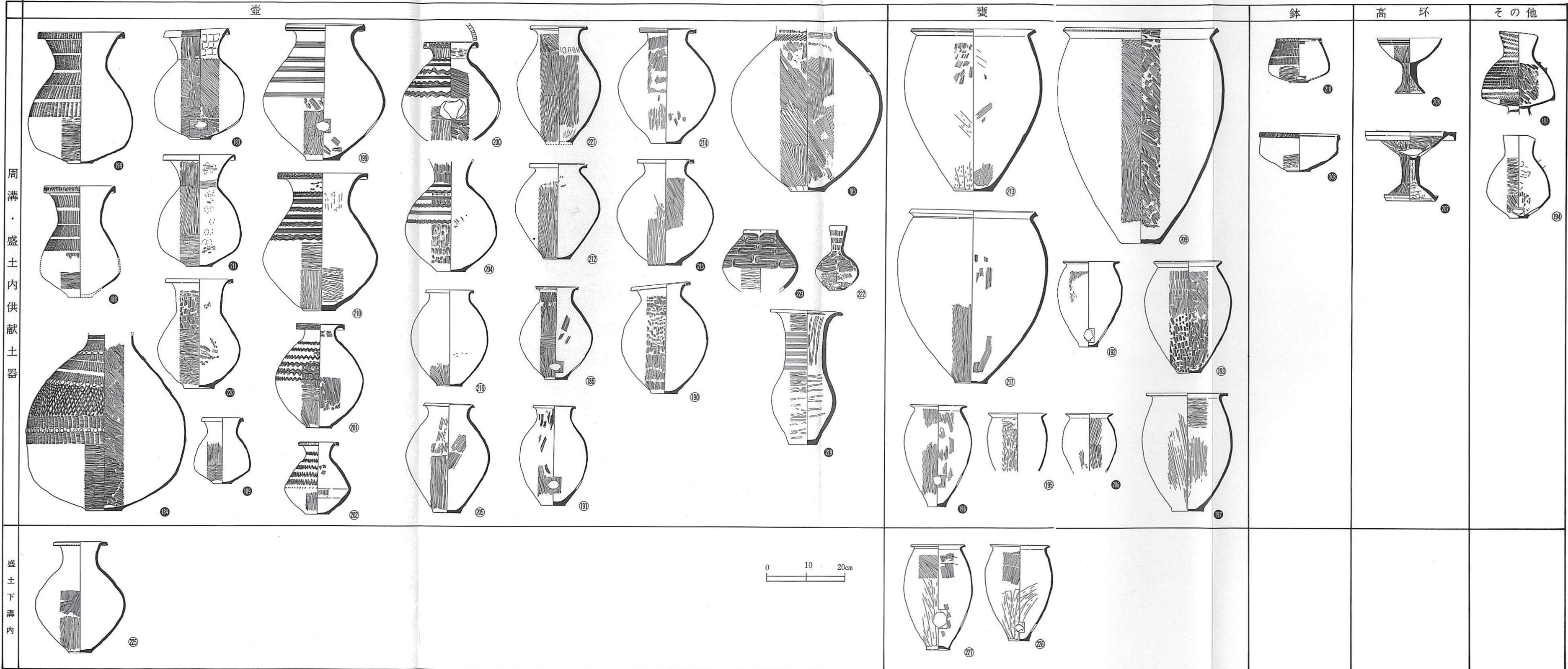


表 5 . 17号方形周溝墓供獻土器一覽表

弥生時代後期～古墳時代前期前半 弥生時代中期前葉から築造され続けていた城山遺跡の方形周溝墓群のうちの21号方形周溝墓は、供獻土器からみて弥生時代後期前葉に比定されており、したがって弥生時代後期のうちの極く初期の段階では、弥生時代中期と同じベース面で、引き続いで方形周溝墓が築造されており、当該地は墓域であった。

弥生時代後期中葉以降は方形周溝墓が築造されなくなり、方形周溝墓群も周溝部から次第に埋まっていったものと思われる。この埋土層に土器が認められた。

したがって、調査区北半では方形周溝墓の周溝部は埋まりつつもまだその姿を留めていたものと思われ、弥生時代後期の段階ではフラットな面がみられず、この状態は黒色粘土が堆積した後(古墳時代前期後半)になっても続いていた。そのためか弥生時代後期中葉から古墳時代前期の遺構はまったくみられず、遺構がみられるのは古墳時代中期以降になってからである。

調査区の南半では弥生時代中期から引き続いて土層のフラットな堆積が続いており、黒灰色粘土上面で弥生時代後期のものと思われる遺構を検出した。しかしその密度は薄く、遺物もまったく検出されなかった。

古墳時代前期後半～古墳時代後期 弥生時代後期末～古墳時代前期前半(庄内式期)にかけての堆積層である黒色粘土の上面で、古墳時代中期後半～古墳時代後期初頭に比定される古墳が検出された。黒色粘土の直上で古墳時代前期後半(布留式期)の土器が検出されており、黒色粘土は古墳時代前期後半～古墳時代後期初頭までの面であるといえる。しかし、調査区南半部では黒色粘土の上に暗灰色粘土の堆積がみられ、暗灰色粘土上面が古墳時代中期後半～後期初頭の面と考えられた。さらに古墳が検出された調査区中央部(Aトレンチ～Cトレンチ北端部)の黒色粘土上面の標高が南半部の暗灰色粘土上面の標高よりも高い位置にあり、したがって調査区中央部付近が高台状になっていたものと考えられ、古墳はその高台に築造されたものといえる。

今回の調査では古墳は7基検出された。すべて方墳である。築造された時期は古墳時代中期後半～後期初頭であるが、これらは出土した土器などにより4時期に分類できる。すなわち、Ⅰ期(5世紀第3四半紀)、Ⅱ期(5世紀第3四半紀～第4四半紀)、Ⅲ期(5世紀第4四半紀)、Ⅳ期(5世紀末～6世紀初頭)である。Ⅰ期には城山1号墳が、Ⅱ期には城山2号墳、Ⅲ期には城山4号墳、城山5号墳、城山6号墳、Ⅳ期には城山3号墳、城山7号墳が相当する。

Ⅰ期の城山1号墳は須恵器、土師器がかなりまとまって供獻されていたが、供獻土器の中に韓式土器と考えられるものは1点もみられなかった。

Ⅱ期の城山2号墳にも須恵器、土師器が供獻されていたが、韓式土器は認められなかった。

Ⅲ期になると供獻土器のうちの大部分を韓式土器が占めており、須恵器、土師器は土器棺の蓋を加えても4点にしかならない。

Ⅳ期では埴輪の使用が認められるのが特徴である。又、Ⅳ期の古墳がすべて墳丘の極く一部分を検出したのみであり、確かではないが、検出部分では韓式土器は出土しなかった。

これらの各時期の特徴のうち、供獻遺物の中に韓式土器がみられるのがⅢ期の古墳に集中して

おり、しかもⅢ期の古墳がともに周溝を接するように限られた地域に集まっているのが注目される。前段階のⅠ・Ⅱ期には韓式土器の供獻は皆無であり、Ⅲ期になって突如盛行し供獻土器の大部分が韓式土器という状況になり、Ⅳ期では再び韓式土器はみられなくなり須恵器、土師器が供獻されている。この変化が古墳を築造した母体の集団の変化なのか、または単なる時期的な流行のあらわれなのかはこの程度の資料ではうかがうよしもないが、注目される所である。

又、Ⅳ期になって円筒埴輪(朝顔形、形象埴輪片も極く少量みられる)が認められるのも時期的な変化なのか。城山7号墳の東方約15mの、現在の中央環状線南行き車線の部分でも、過去の調査において古墳が検出されており(調査者は5世紀末から6世紀初頭のものと報告されている)^{注1}、この古墳でも円筒埴輪が検出されている。Ⅳ期に含まれるものであり、これを加えても、現段階では城山遺跡においてはⅣ期の古墳にのみ埴輪の使用が認められる傾向がみられる。

次に、Ⅲ期の古墳のうち城山4号墳と城山5号墳は、互いに周溝を接するように築造されているが、周溝の埋没状況からみて同時期に、しかも徐々に埋まつていったものと考えられる。さらに、埋葬主体部は城山4号墳が木棺直葬、城山5号墳は土器棺であり異なるが、主体部墓塚内の被葬者の足元に韓式土器の甕を置いており、似かよった副葬形態を呈している。これは他の古墳にはみられないものであり、又、被葬者の頭位の方向がほぼ一致するなど、両古墳の被葬者が極く近親者であった事をうかがわせる。

城山5号墳の埋葬主体部が韓式土器の甕と土師器の甕を互いに口縁を合わせて横に寝かせた、いわゆる合わせ口の土器棺である事も注目されるものである。この土器棺は、埋葬の状況からみて火葬骨を収めたものとは考えられず、又土器棺の法量から、被葬者は乳幼児であると思われる。当調査区で検出した弥生時代中期の方形周溝墓からも、木棺直葬の主体部とともに土器棺が検出されているが、これらの土器棺は2次的な埋葬主体部である。これに対して城山1号墳の土器棺は、小さいながらも一墳一葬の中心主体部であり、城山5号墳の墳丘は明らかに土器棺の被葬者を埋葬するために築造されたものである。城山遺跡の南方に位置する長原遺跡では、5世紀中葉～6世紀に比定される古墳が数多く検出されているが、その中に土器棺を埋葬した例がみられる。これは長原87号墳と称される一辺約13mの方墳であり、須恵器の甕を棺に転用した埋葬施設が検出されている。調査担当者は、古墳の中心埋葬施設は後世の削平を受けて破壊されており、^{注2}土器棺の被葬者は長原87号墳の中心的な被葬者の親族であろうと推定されている。

長原87号墳の土器棺は2次的埋葬とされており、古墳の埋葬形態におけるこのような類例は他には確認できなかったが、この土器棺の埋葬形態が方形周溝墓における土器棺の埋葬形態の延長線上にあるものと理解できると思われ、この形態が土器棺の普遍的な埋葬形態であるとすれば、城山5号墳は極めて特殊な例であるといえ、被葬者が集落内の有力者の家族である乳幼児であり、そのために小さいながらも墳丘を有する城山5号墳の中心被葬者とされたのであろう。ただし、城山古墳群の中においては2次的埋葬施設としての土器棺が、現段階では検出されていないので、城山古墳群の中における城山5号墳の土器棺の位置づけがある程度不明瞭な点は拒めない。

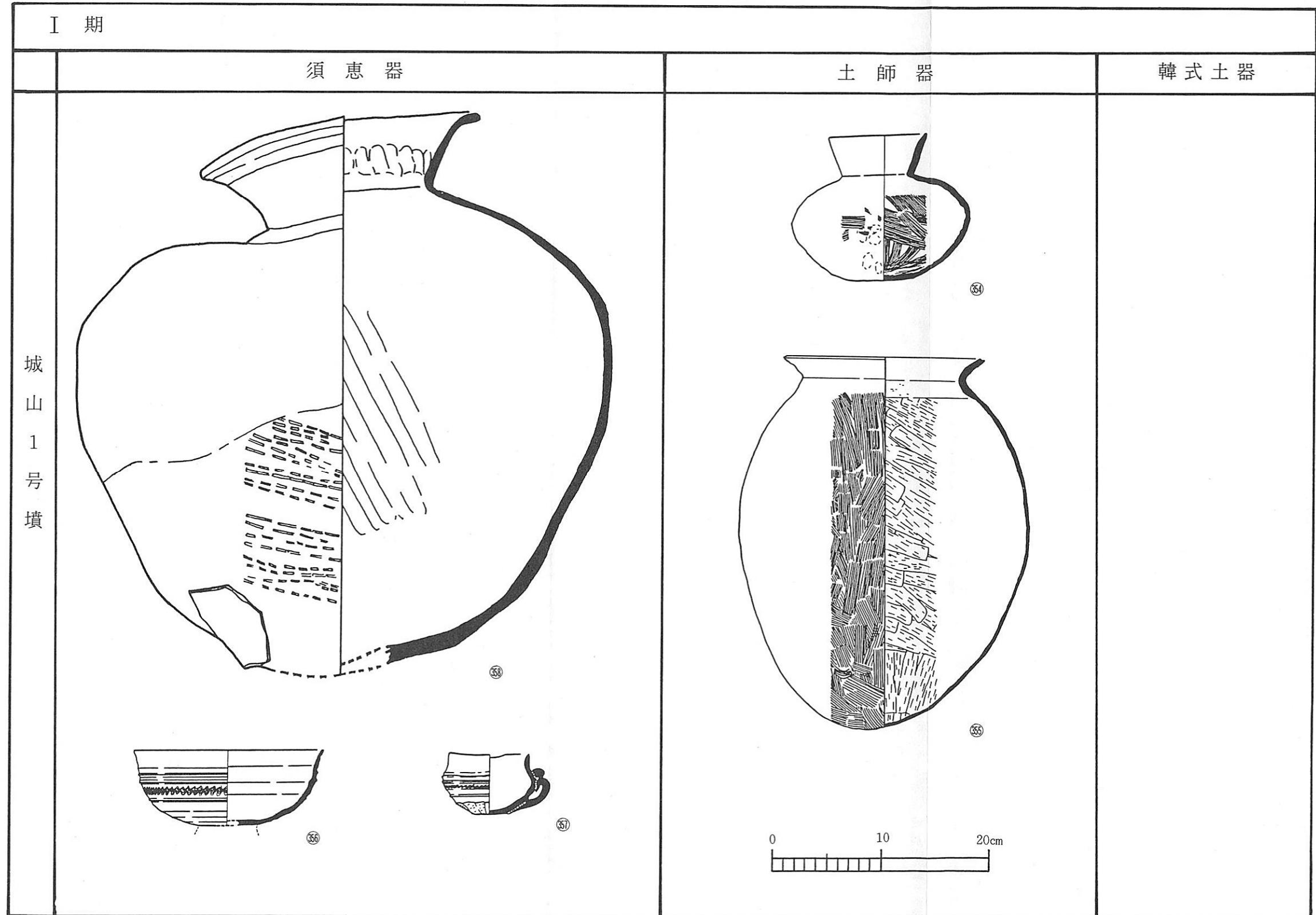


表 6 . 城山遺跡古墳出土土器一覽表 (1)

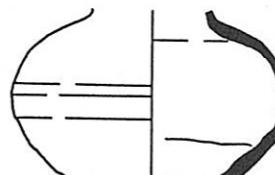
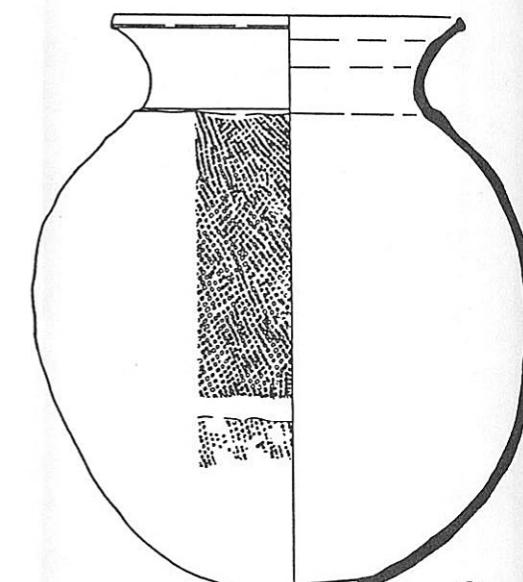
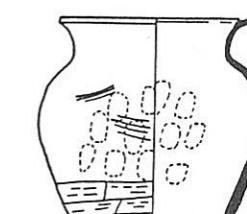
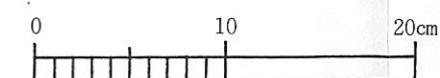
III 期			
	須 惠 器	土 師 器	韓 式 土 器
城 山 4 号 墳	 ③⑧		 ③⑨  ③⑩
城 山 6 号 墳			 ③⑪ 

表 8 . 城山遺跡古墳出土土器一覽表 (3)

III 期

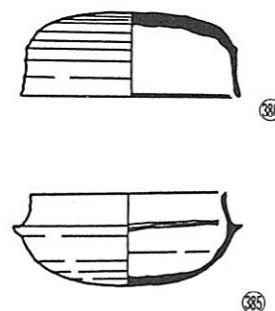
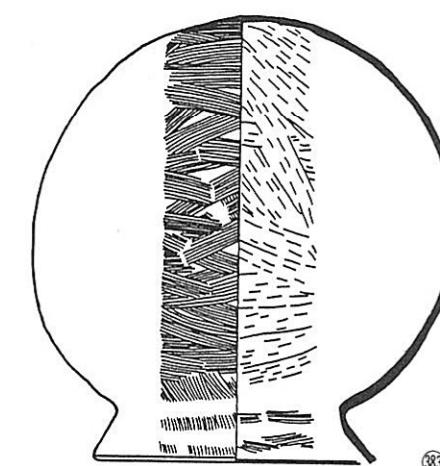
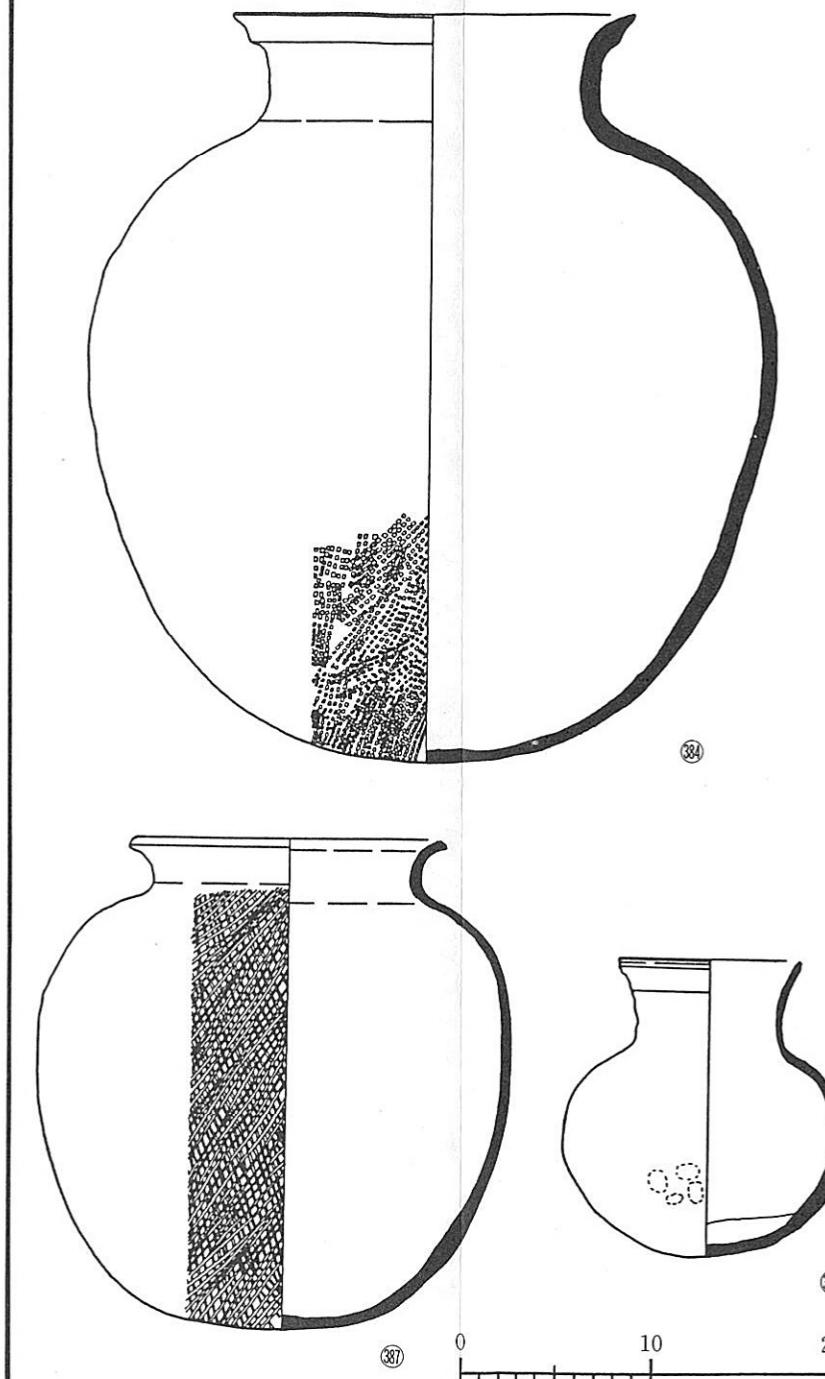
	須 惠 器	土 師 器	韓 式 土 器
城山 5号墳			

表 9. 城山遺跡古墳出土土器一覽表 (4)

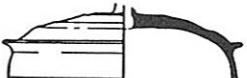
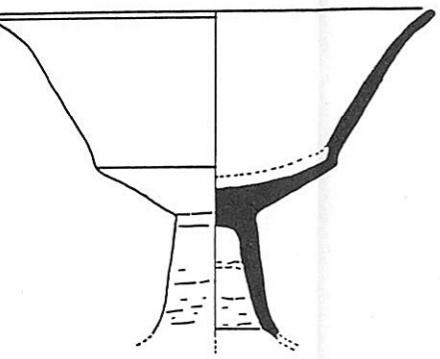
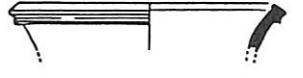
IV 期			
	須 惠 器	土 師 器	韓 式 土 器
城山 7号墳			
城山 3号墳			

表10. 城山遺跡古墳出土土器一覽表 (5)

いずれにしても類例が少なく、城山5号墳の埋葬形態が特殊なものがあるいは普遍的な形態に含まれるべきものなのかははっきりしない。今後の発掘調査による類例の増加を待たねばならない。

亀井遺跡では、城山古墳群のⅠ期よりも古い古墳時代中期中葉に近い後半(須恵器Ⅰ—2型式)^{注3}に属する亀井古墳や、ST1301・ST1501と称される古墳(円筒埴輪が出土しており、調査者は古墳時代中期後半～後期初頭に比定されている)も検出されており、これらをも含めて、亀井、城山の地域に小方墳がある程度の群を成して点在していた事は明らかである。今後さらに細かい検討を加える事によって古墳時代中期～後期にかけての墓域の様相がより明確となってくるものと考える。

飛鳥時代～平安時代 古墳時代から存在していた調査区北端部及び南半部の自然河川の氾濫のために、調査区の全般にわたって古墳時代後期初頭以降はオーバーフローした砂及びシルト質の土層の堆積がみられ、調査区付近は河川の氾濫、滯水が繰り返され、不毛の地となっていた事がうかがわれた。しかし、飛鳥時代の面で自然河川の最終的な肩が検出され、自然河川が埋没した後は、奈良時代の面で溝状遺構、土塙などの遺構が検出された。調査区の面積に対する遺構の密度は極端に薄く、居住地域という感じはないが、皇朝十二銭、土馬などの特殊な遺物が検出されており、氾濫を繰り返す合間の比較的安定した時期に、祭祀などを行っていたのではないかと思われる。調査区が本格的に安定するのは平安時代後期になってからである。足跡が検出されており、足跡の他には畦畔などは検出されなかったが、付近一帯は水田となっていたものと思われる。

飛鳥時代～平安時代の遺構の稀少さは前述の如くであるが、それに伴ってか遺物の出土量も少ない。しかしその中で、祭祀遺物とされる土馬、そして皇朝十二銭のうちの和同開珎、万年通宝神功開宝、寛平大宝、延喜通宝の5種類、計8枚が検出された事が特筆に値するものである。

中世以降 土層からみても平安時代後期から中世にかけては比較的安定した時期であったといえ、調査区では畦畔などの遺構は検出されなかったが水田耕作が行われていた。しかし、14世紀後半頃から流れ始めた東除川が、度々氾濫を繰り返し、オーバーフローした砂層の堆積が多く認められた。しかしながら、自然と闘いつつ耕作は続けられたものと思われ、部分的にはマンガン粒を含む粘土層の堆積もみられる。このような状態は近世に至っても続き、安定するのは1704年に大和川が現在のように付け替えられ、それによって東除川が埋没した後になる。東除川埋没以後は付近一帯で再び水田耕作が行われたものと思われ、それを示すように盛土下に暗灰青色粘質土の堆積がみられる。盛土は現在も存在する府道中央環状線施設時の整地層である。

(岩瀬)

註1 大阪府教育委員会・^財大阪文化財センター「亀井・城山」昭和55年12月

2 大阪市立博物館・^財大阪市文化財協会「発掘された大阪」

3 大阪府教育委員会・^財大阪文化財センター「亀井・城山」昭和55年12月

第6章 城山遺跡出土植物遺体について

山 口 誠 治

1. はじめに

今回の調査で出土した植物遺体について同定を試みたので、ここに報告する。出土した植物遺体は弥生時代から10世紀までに堆積した土層より採取されたものである。(城山遺跡東壁断面S T A 136 +50m ~ S T A 137 +40m) 土層断面から採取された試料は、試料ビンにして800個をかぞえるが、そのうち同定したものは100個足らずで一部にすぎないが、今後本報告において全貌を明らかにしたい。

2. 同定結果

同定結果は検出できた試料番号別に表①に示した。なお、100個のうち24個のみが植物遺体を検出できたものであり、残りは菌類や昆虫などを含んでいるのみで植物遺体を検出できなかった。同定した種子は次に挙げる9科9属9種である。

被子植物（単子葉植物）

イバラモ科	Najadaceae	トリゲモ属	<i>Najas sp.</i>
カヤツリグサ科	Cyperaceae	スゲ属	<i>Carex sp.</i>
ミズアオイ科	Pontederiaceae	ミズアオイ属	<i>Monochoria Presl.</i>
		コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i>

被子植物（双子葉植物）

タデ科	Polygonaceae	タデ属	<i>Polygonum sp.</i>
ヒュ科	Amaranthaceae	ヒュ属	<i>Amaranthus sp.</i>
ナデシコ科	Caryophyllaceae		
ウコギ科	Araliaceae	タラノキ属	<i>Aralia Linn.</i>
ミズキ科	Umbelliferae	ノウド	<i>Aralia cordata</i>
		ミズキ属	<i>Cornus Linn.</i>
シソ科	Labiatae	クマノミズキ	<i>Cornus brachypoda</i>
		シソ属	<i>Perilla sp.</i>

表①. 城山遺跡 植物遺体同定結果一覧表

試料番号	層位	時期	同定結果
6	灰褐色砂質粘土	9~10 c	シソ属果皮片? 2個
8	灰褐色砂質粘土	7~8 c?	ヒユ属 1個
11	灰褐色粘土	7~8 c?	種不明 2個
12	灰褐色粘土	7~8 c?	コナギ 1個 種不明 2個
13	灰褐色粘土	7~8 c?	種不明 5個
14	灰褐色粘土	7~8 c?	ヒユ属 2個
15	灰褐色粘土	7~8 c?	タデ属 2個 ヒユ属 2個 コナギ 16個
16	灰色粘土	7~8 c?	タデ属 2個 コナギ 21個
17	灰色粘土	7~8 c?	タデ属 2個 コナギ 8個
18	灰青色粘土(やや微砂含む)	5~6 c?	タデ属 5個 コナギ 12個 トリゲモ属 4個
19	灰青色粘土(やや微砂含む)	5~6 c?	タデ属 3個 ヒユ属 1個 トリゲモ属 3個 コナギ 24個
20	灰青色微砂と灰黄色微砂の混合層(水平に堆積)	5~6 c?	タデ属 4個 ヒユ属 2個 トリゲモ属 2個 コナギ 8個
24	灰青色微砂と灰黄色微砂の混合層(水平に堆積)	5~6 c?	ヒユ属 1個
25	暗灰色粘土(灰色微砂が層状に堆積)	5~6 c?	ヒユ属 2個
26	暗灰色粘土(灰色微砂が層状に堆積)	5~6 c?	ヒユ属 1個
27	暗灰色粘土(灰色微砂が層状に堆積)	5~6 c?	ナデシコ科の一種 2個
28	暗灰色粘土	5~6 c?	ナデシコ科の一種 2個
29	暗灰色粘土	5~6 c?	ナデシコ科の一種 3個
30	暗灰色粘土	5~6 c?	種不明 6個
33	暗灰色粘土	5~6 c?	スゲ属 1個
63	灰色砂	弥生時代	種不明 1個
64	灰色砂	弥生時代	種不明 10個 ノウド 1個
65	灰色砂	弥生時代	種不明 5個 スゲ属 1個
67	灰色砂	弥生時代	クマノミズキ(半分のもの) 1個

同定したうちで木本はクマノミズキ1個である。残りの、トリゲモ属9個、スゲ属2個、コナギ90個、タデ属18個、ヒュ属12個、ナデシコ科7個、ノウド1個、シソ属2個が草本である。この植物遺体の中で食用にできる植物遺体は、コナギ、ヒュ属、ノウド、シソ属である。また水生植物及び好湿性植物は、トリゲモ属、コナギ、タデ属である。次に人里植物は、ヒュ属、ナデシコ科である。今回の分類に関しては、大井次三郎著の「日本植物誌」に従った。

3.まとめ

今回の同定で言えることは、特に草本の種子が多く出土しているということである。その草本の中で注目に値するのは、代表的な水田雑草であるコナギである。このコナギは全国各地の水田や水湿地に群生する抽水性の一年草で、古くは食用にしていたが現在ではほとんど利用されていない。しかし、南方の諸国では、現在でも野菜の代用にしているという。コナギは和名で、漢字名は小菜葱、万葉名は奈伎、奈宜、水葱である。別名として上記のほかに、ミズナギ、イモグサ、ツバキバ、ツバキグサ、ナギなどがあり、漢名では薺草である。なお、日本及び朝鮮、中国大陆、台湾、マレーシア、インドなどに広く分布している。

ところで今回の発掘調査の結果を類推してみると、弥生時代の層位よりコナギが出土していないので今のところ確実なところは言えないが、確かに弥生時代から10世紀の間水稻耕作が続いていると考えられる。

すなわち、稻作により調査地域が湿地化していたものであろう。それと同時に人間活動がさかんであったことも言えるであろう。湿地化が進んでいたことは、水生植物及び好湿性植物であるトリゲモ属、コナギ、タデ属の種子の出土が実証している。

また、木本であるクマノミズキが1個しか出土していないので、この地域に植生していたとは言えない。しかし、この付近にはえていて流れついたものであると思われる。このクマノミズキは落葉高木で山地にはえ、幹は直立して分枝し高さ約10mぐらいに達する。和名でクマノミズキは熊野水木と書き、これはミズキの名をもつ種類が多いため和歌山県の熊野という地名を前につけたものである。分布は温帯、暖帯の本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、ヒマラヤに広がっている。以上を報告する。

[参考文献]

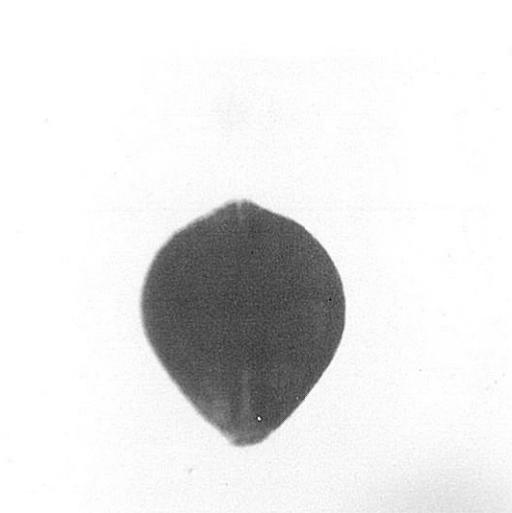
- (1) 大井次三郎著 1983 「新日本植物誌 顯花篇」 至文堂
- (2) 北村四郎・村田源共著 1982 「原色日本植物図鑑 木本編」(I)・(II) 保育社
- (3) 下滝未男・石戸忠共著 1980 「日本水生植物図鑑」 北隆館



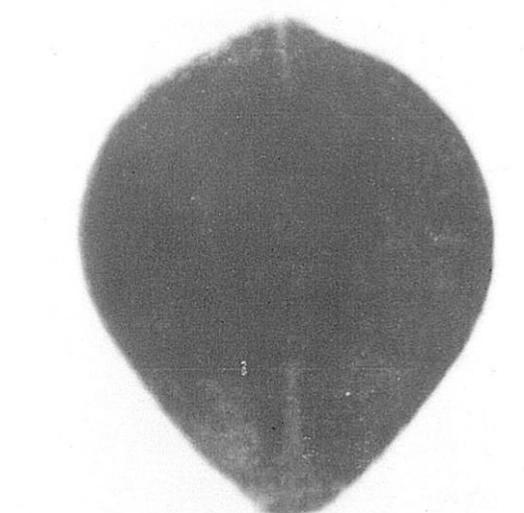
コナギ種子($\times 40$)



ノウド種子($\times 20$)



タデ属種子($\times 20$)



タデ属種子拡大($\times 40$)



クマノミズキ種子($\times 10$)



クマノミズキ種子拡大($\times 10$)

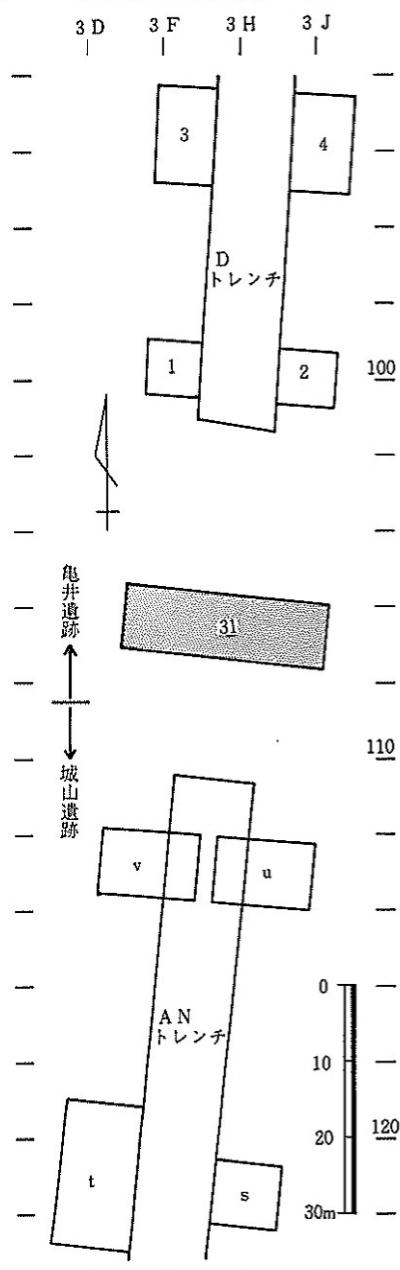
附章 龜井遺跡31トレンチ

城山遺跡の北側に隣接する龜井遺跡では、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う事前発掘調査をはじめ多くの発掘調査が行われてきたが、近畿道関係の調査に関しては、城山遺跡に隣接する南端部が未調査であったため、今回橋脚部分を含めて横長のトレンチを設定し発掘調査した。そのため、調査結果を附章として城山遺跡(その1)に付載する事となった。

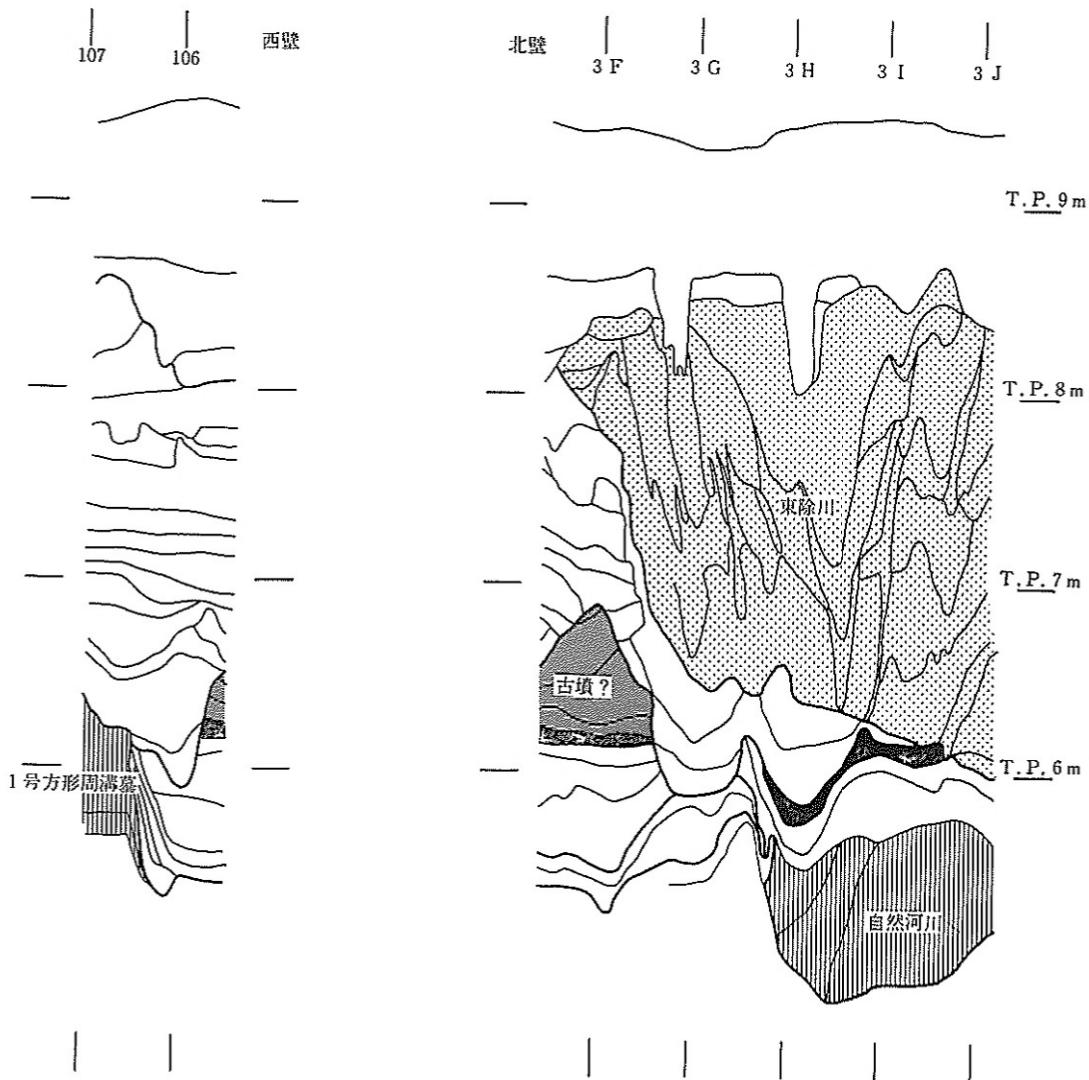
トレンチの位置は城山遺跡ANトレンチ北端より北方約20m、龜井遺跡Dトレンチ南端より南方約25mの地点で、トレンチは、南北約8m、東西約25mの長方形である。

第1項 層序

調査区の東半部は、最上層の中央環状線施設の際の盛土下に自然河川が重なって検出されており、調査したT.P+4.8m付近までがすべて河川内埋土の堆積であった。又、西端部ではT.P+7.4m付近で青灰色粘土を検出した。この層の上面は城山遺跡の平安時代後期の遺構面に対応するものである。青灰色粘土より上の層はすべて東除川の影響を受けた層である。東除川の最深部はT.P+6.2m付近にまで達しており、河川内の埋土は砂利、シルト、粘土などが複雑に混り合っている。青灰色粘土の次に城山遺跡と対応できる層は、T.P+6.2m付近で検出した黒色粘土で、この上面が古墳時代前期後半のベースとなっている。トレンチ北壁及び西壁でみられる黒色粘土上の3層(下から暗灰色粘土、灰青色粘土と黒色粘土の混合層、灰青色砂質粘土と黒色砂質粘土の混合層)は盛土と思われ、トレンチの極く一端にかかったのみではっきりしないが、古墳である可能性がある。黒色粘土及びその下の3層(上から黒色シルト質粘土、灰青色粘質シルト、灰青色シルト)は、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけて堆積した層であり、その下の灰青色粘土(調査区で検出した部分が、下層で検出された方形周溝墓の周溝内であったため、T.P+5.5m～T.P+5.9mにかけて堆積がみられた)上面が弥生時代後期の自然河川の肩となっている。灰青色粘土の2層下の暗灰青色粘土上面(T.P+5.6m付近)が弥生時代中期の遺構面となっている。



第165図 龜井31トレンチ位置図



第166図 龜井31トレンチ西壁・北壁基本土層図

第2項 弥生時代中期

弥生時代中期の遺構としては、トレンチ西半部で方形周溝墓を1基検出した。又、トレンチ東南部で弥生時代後期の自然河川の合流部分が検出されているが、その部分の中州にあたる地点で弥生時代中期後葉の土器が検出されている。これらは暗灰青色粘土上面で検出された。

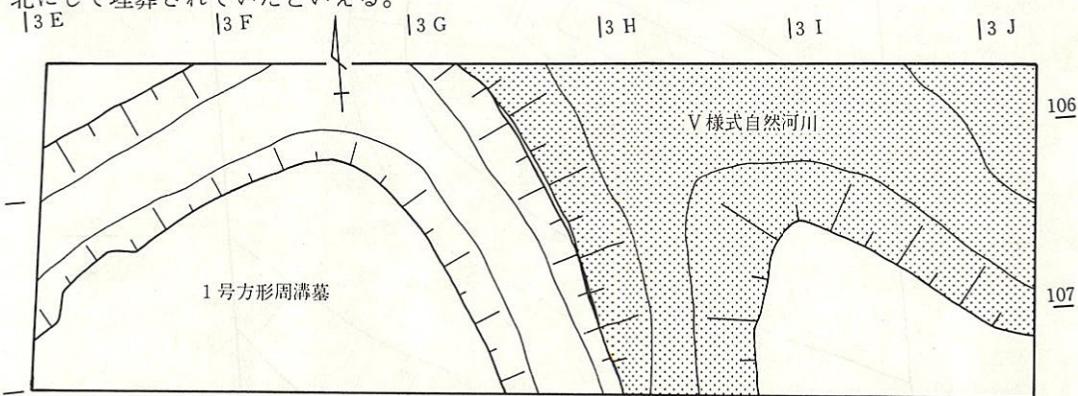
〈1号方形周溝墓〉 トレンチの西半部で検出された。今回の調査で検出したのは北側及び東側の周溝とマウンドの2分の1弱で、マウンドの四角のうち検出したのは北東コーナーのみで、他は調査区外にある。したがって墳丘の全容は明らかでないが、検出部分で東西約10m、南北約8mを測った。その外側に幅約3m～4mの周溝を巡らしている。墳頂端部から周溝底面までの高低差は約1.2mを測った。墳丘の主軸方位はN-25°-Wを示している。

墳丘は、ベースの暗灰青色粘土上に黒灰色粘土(約0.1m)、灰緑青色粘土(約0.2m)、灰青緑色砂

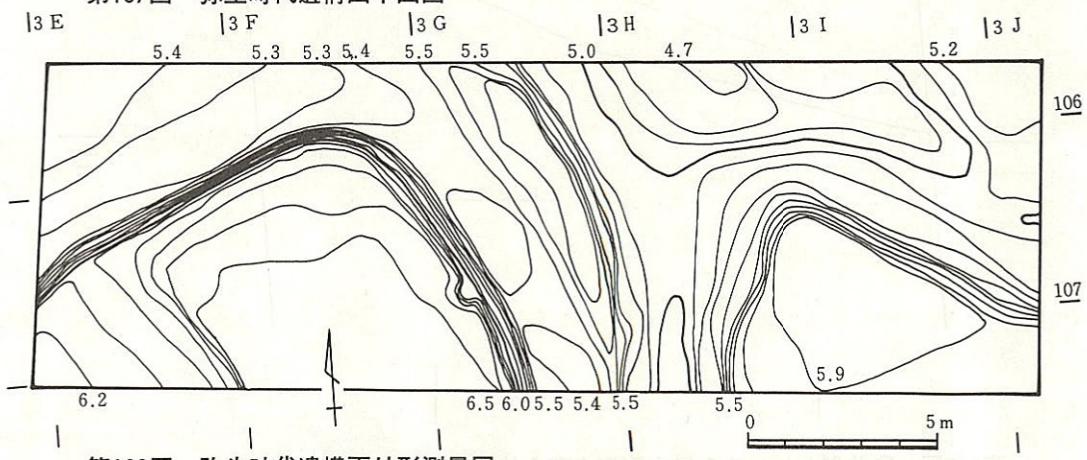
混り粘土(約0.6m)、暗灰青緑色粘土(約0.1m)の順に盛り上げており、埋葬主体部の墓塚の掘り込みは灰青緑色砂混り粘土上面から行っている。墳丘の西端部はベース面まで後世の擾乱を受けていた。又、1号方形周溝墓は木棺の主体部の他に土器棺が5基検出されたが、それらの掘り込み面はすべて盛土最上層の暗灰青緑色粘土であった。

〈埋葬主体部〉 1号方形周溝墓からは、組み合わせ式木棺直葬の主体部が1基、土器棺の主体部が5基、計6基の埋葬主体部が検出された。

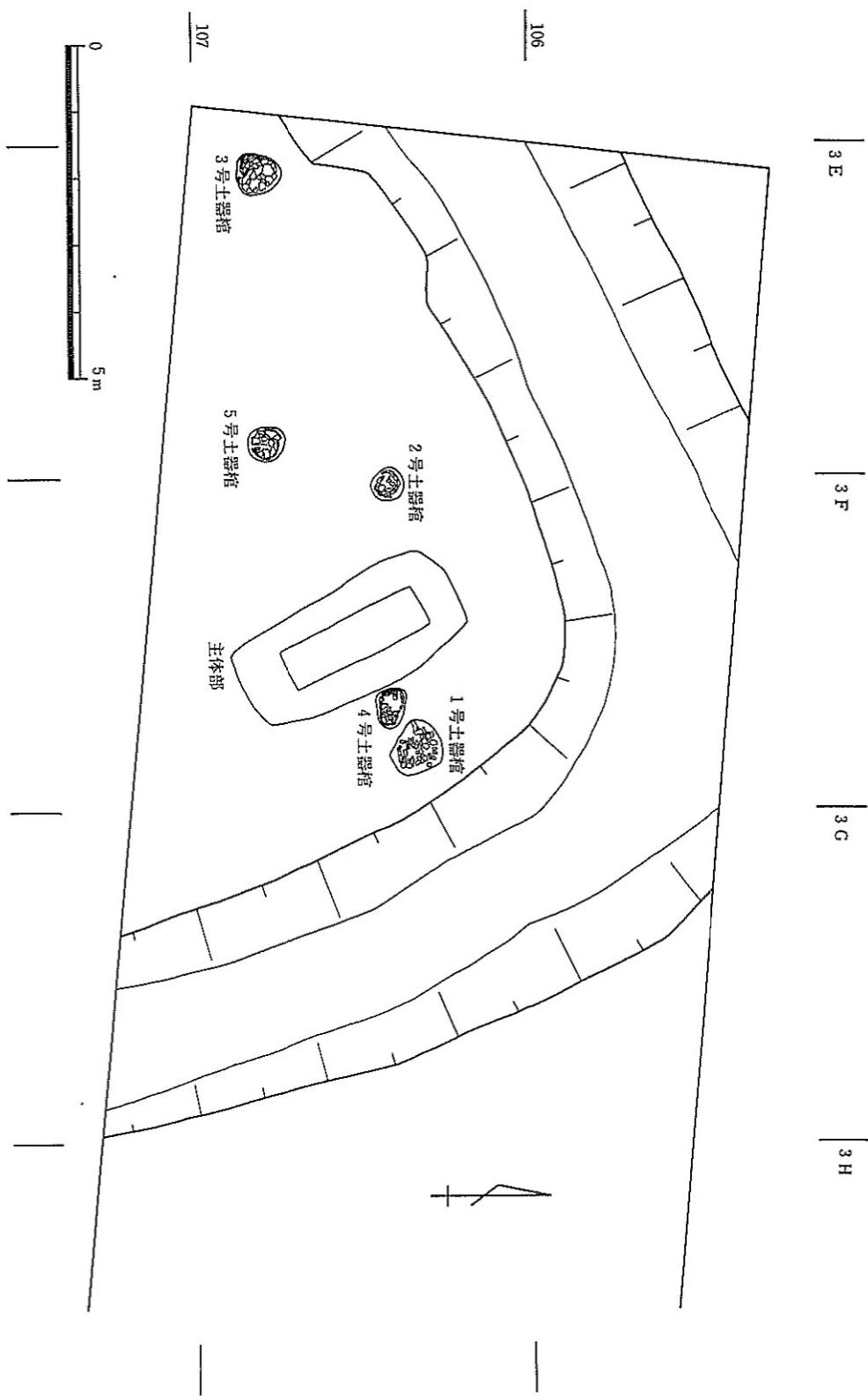
1号主体部 墳丘上の北東部で検出した。組み合わせ式木棺の木棺直葬主体部である。東西方向の堆定中央軸からは極端に東側に外れており、又、南北軸からもやや北へ外れている。木棺及びその痕跡ははっきりしなかったが、盛土と墓塚掘り方、さらに墓塚掘り方内埋土と木棺内埋土との土の相異によって検出できた。それによると、木棺の内寸は長さ2.15m、北小口部幅0.65m、南小口部幅0.65m、検出面からの深さ約0.12mを測った。木棺の主軸方位はN-25°Wを示しており、これは墳丘の主軸方位と一致する。木棺の内部から人骨・人歯、副葬品などは検出されなかつたが、北端部で水銀朱が検出されており、この部分が頭位であったと思われ、したがって頭を北にして埋葬されていたといえる。



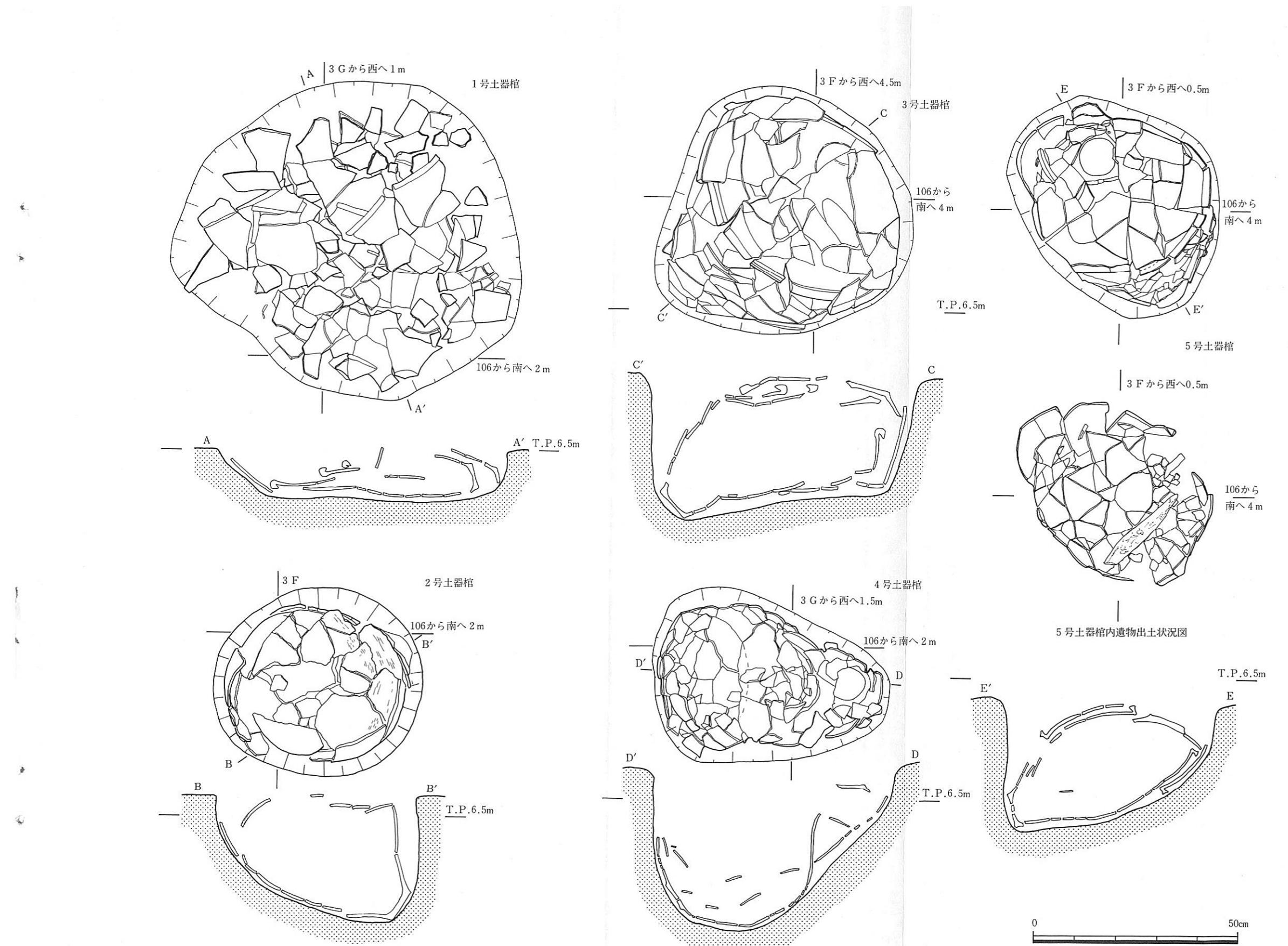
第167図 弥生時代遺構面平面図



第168図 弥生時代遺構面外形測量図



第169図 亀井31トレンチ1号方形周溝墓全体図

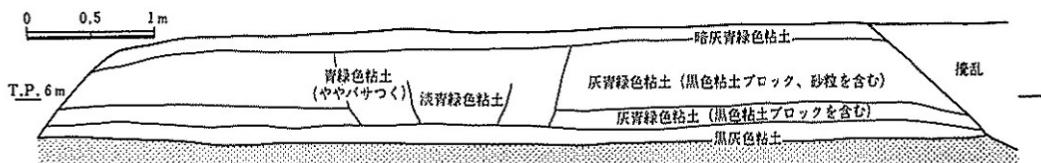


第170図 亀井31トレンチ1号方形周溝墓1号～5号土器棺平面図(断面図)

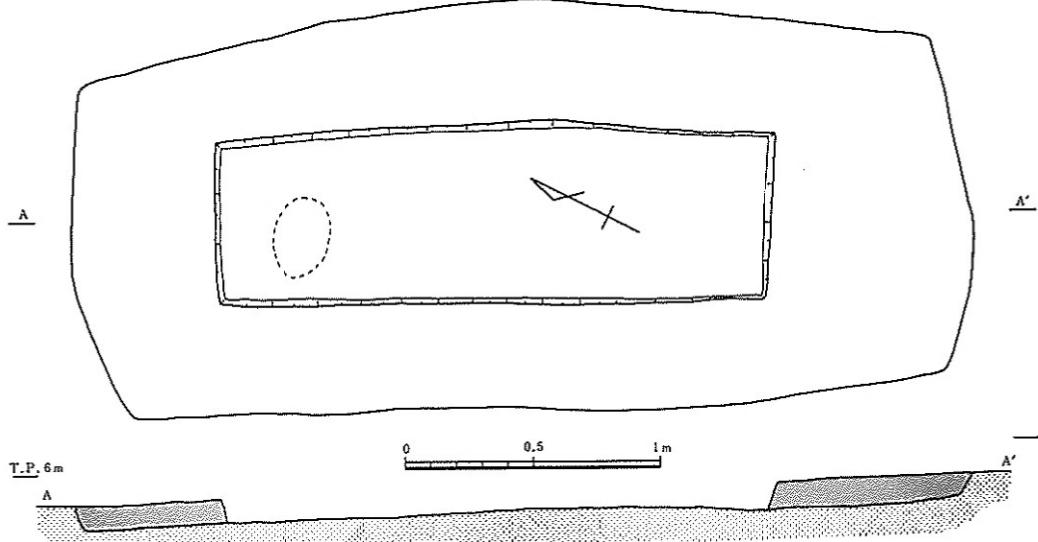
1号主体部のほかには木棺直葬の主体部は検出されなかったが、1号主体部の位置からみて、これが1号方形周溝墓の中心埋葬主体部とは考えられず、中心埋葬主体部は墳丘の中央部付近にあったものと思われる。周溝墓の中央部分は後世の擾乱のために盛土が削平されており、したがって中心主体部もその際に破壊された可能性が強い。

1号土器棺 1号主体部のさらに東側の、墳丘東側周縁部付近で検出された。盛土最上層の暗灰青緑色粘土内の、墳頂部より約5cm下にあり、蓋の方向すなわち頭位はN-17°30'-Wの方向にある。棺の本体は、口縁部を打ち欠いた壺の外側に底部を合わせた状態で割った甕を重ねるいわゆる二重構造であり、鉢を転用した蓋をかぶせて横に寝かせていた。棺身は遺存状況が比較的良好でほぼ原状を留めていたが、蓋はバラバラに散乱した状態で検出された。棺内から人骨、人歯、副葬品などは検出されなかった。

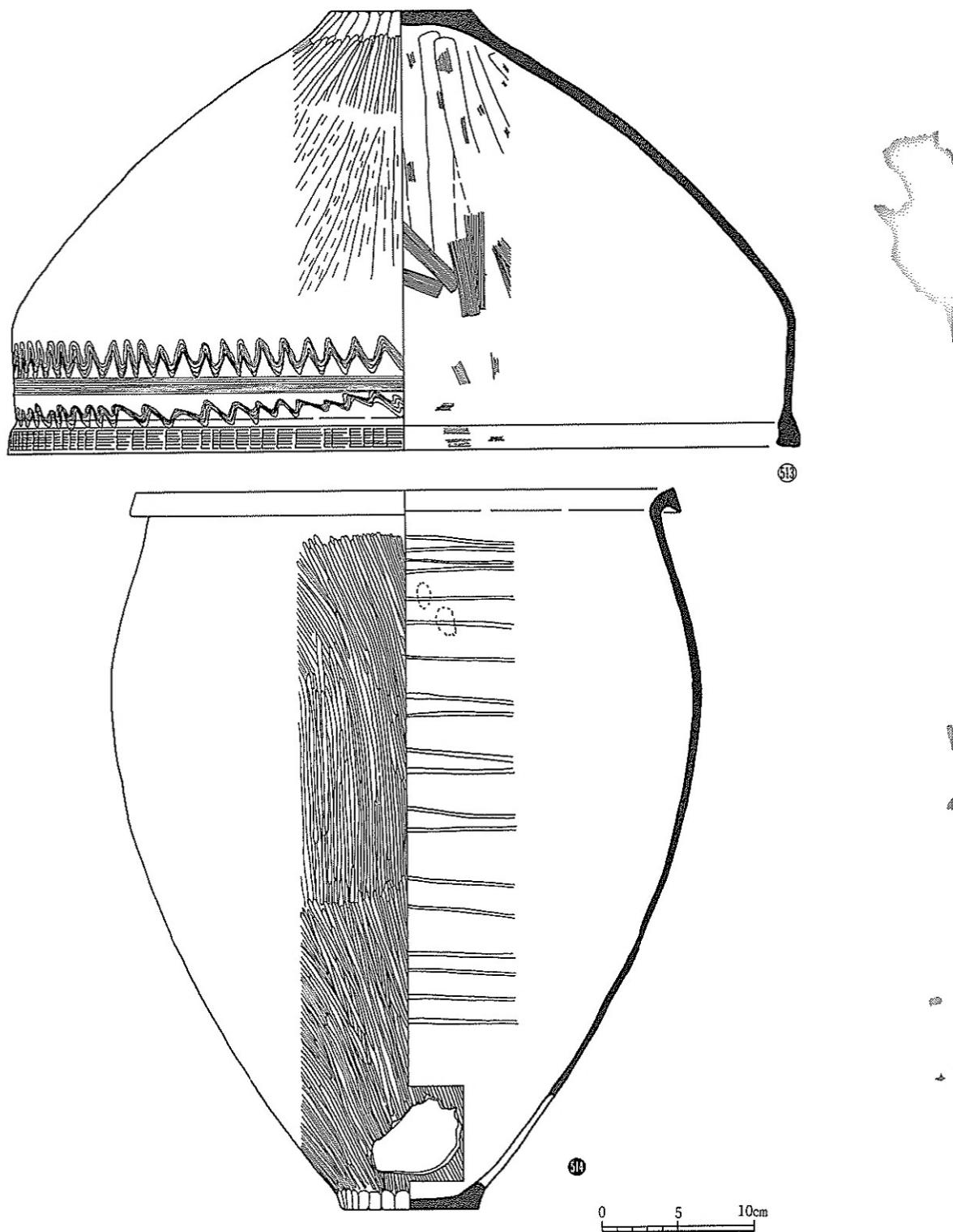
(515)は棺身の壺である。体部は中位で丸く張り出しており、長胴の形状を呈している。体部外面上半に波状文、直線文を計3帯、交互に配している。器面の調整は外面をヘラミガキと一部刷毛調整、内面は刷毛調整である。体部最大径40cm、現有器高41cmを測った。(514)は甕である。暗茶褐色を呈しており、胎土に角閃石を多く含むいわゆる生駒西麓産の土器である。口縁部はわずかに外反し、端部が下方に屈曲している。体部は比較的上位で張り出している。体部外面に密なヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキを施している。口径35cm、器高47cmを測った。体部下端付近に焼成後の穿孔を1ヶ所有する。(513)は棺蓋であり、大型の鉢を転用している。いわゆる段状口縁で、体部は腰部に稜を持つ。口縁端部外面に1帯の簾状文、体部外面上半に波状文と直線文を交互に計3帯配している。器面の調整は外面をヘラミガキ及びヘラ削り、



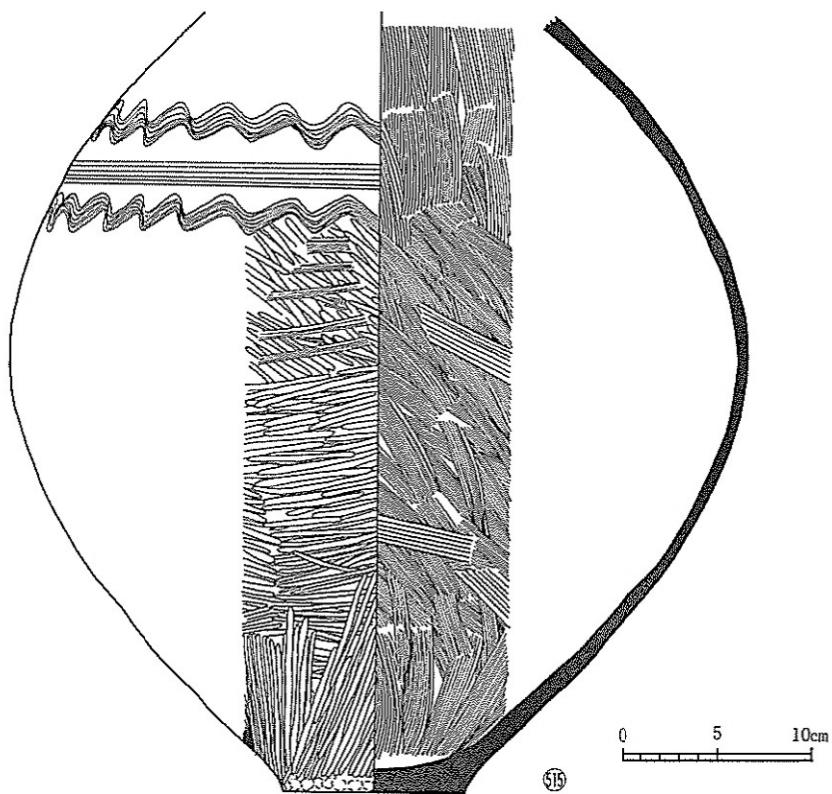
第171図 龜井31トレンチ1号方形周溝墓盛土断面図



第172図 龜井31トレンチ1号方形周溝墓主体部平面図・断面図



第173図 1号土器棺



第174図 1号土器棺身

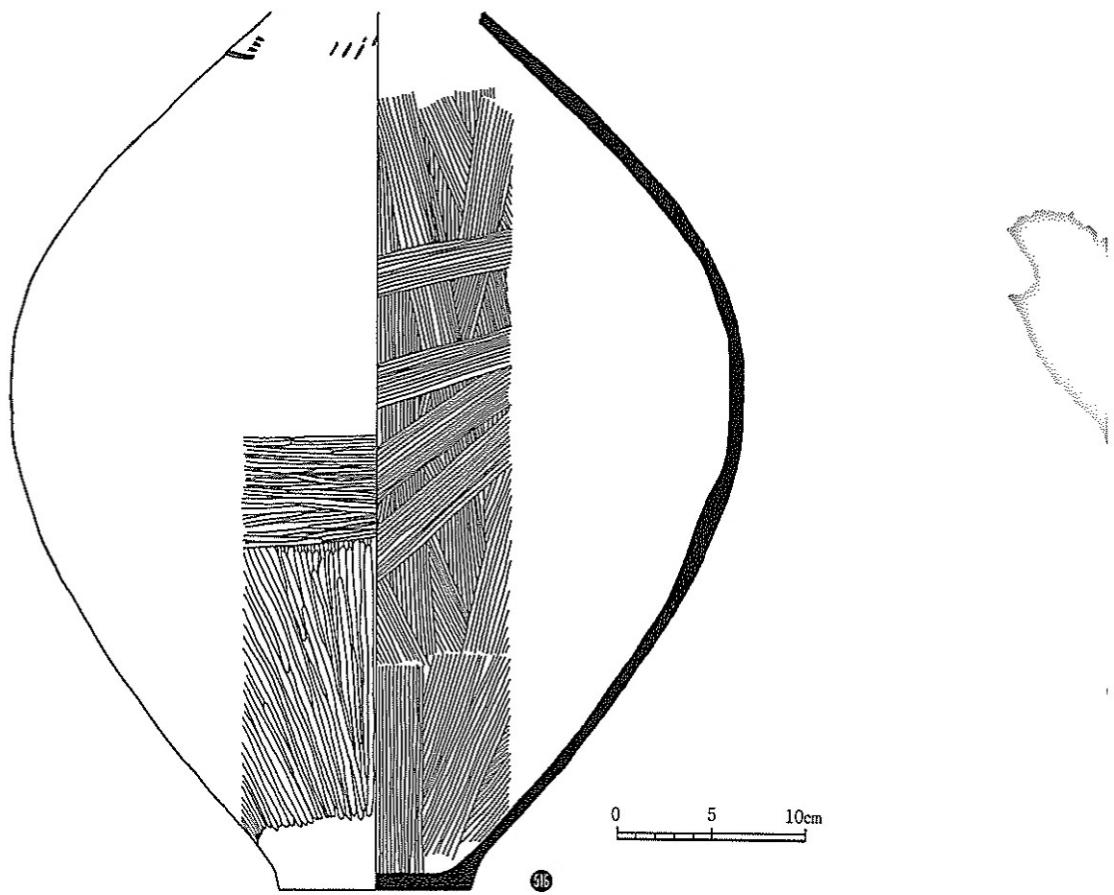
内面は刷毛調整による。口径51.6cm、器高30cmを測った。

2号土器棺 1号主体部のすぐ西側の、墳丘北側周縁部付近で検出した。盛土最上層の暗灰青緑色粘土内で、墳頂部より約4.5cm下にあり、頭位はN—120°—Wの方向にある。棺身は口縁部を打ち欠いた壺で斜めに寝かして置かれていた。蓋と思われる土器は認められなかった。棺内から人骨、人歯、副葬品などは検出されなかった。

(516) は棺身の壺である。体部は中位付近で丸く張り出しており長胴の形状を呈する。体部外面の上端付近に刻目文を配する。器面の調整は体部外面をヘラミガキ、内面は刷毛調整による。暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の土器である。体部最大径38.4cm、現有器高45.3cmを測った。

3号土器棺 トレンチの南西端部にあたる墳丘北側周縁部付近で検出した。盛土第2層の暗灰青緑色砂混り粘土内で、墳頂部より約25cm下にあった。掘り込み面は盛土最上面である。頭位はN—47°—Eの方向にある。棺身は非常に大型の壺で、蓋には大型の鉢を転用してかぶせており、斜めに寝かせた状態で検出された。棺身、蓋ともに遺存状態が非常に良好であった。棺内から人骨、人歯、副葬品などは検出されなかった。

(518) は棺身の壺である。口縁は極端に短く、斜めに外反して終る。端部は下方に屈曲している。体部は上位から中位にかけてなだらかに丸く張り出す。口縁端部外面に刺突文を配する。器面の調整は体部外面を縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ及びヘラ削りによる。

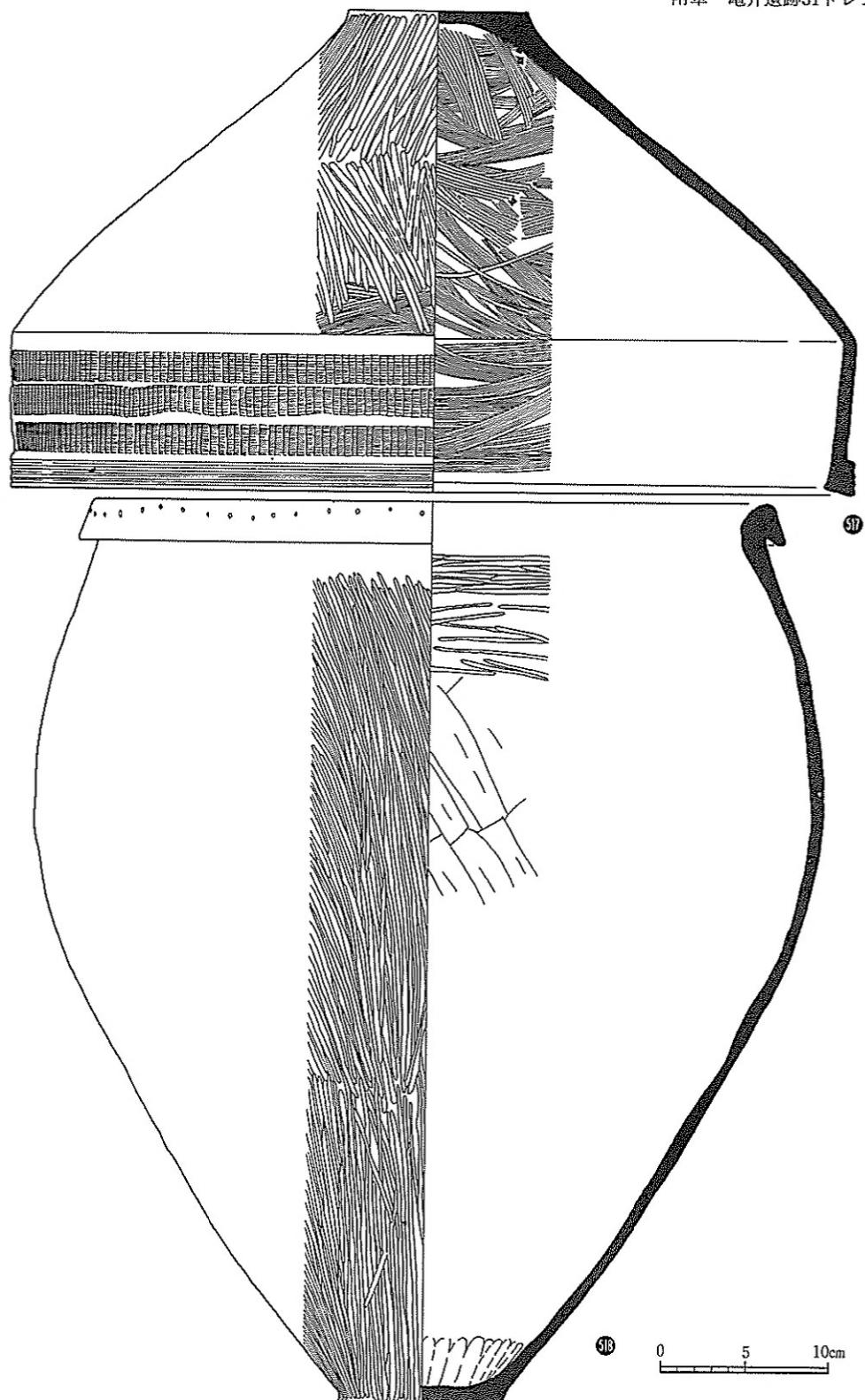


第175図 2号土器棺

暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の土器である。口径40cm、器高54cmを測った。(517)は蓋である。大型の鉢を転用している。口縁は段状を呈し、体部は腰部にはっきりした稜を持つ。口縁端部外面に凹線文を配し、体部外面には3帯の簾状文を配する。器面の調整は体部外面はヘラミガキによるが、上端は刷毛調整の後でヘラミガキを施している。体部内面は刷毛調整による。暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の土器である。口径50cm、器高28.8cmを測った。

4号土器棺 墳丘東側周縁部付近の、1号主体部と1号土器棺の間の地点で検出した。盛土第2層の灰青色砂混り粘土内の、墳頂部より約10cm下で検出されたが、掘り込み面は盛土最上層である。棺身は口縁部を打ち欠いた壺で、蓋は口縁部を打ち欠いた甕を転用して被せている。斜めに寝かせた状態で検出され、頭位はN—90°—Eの方向にある。1号主体部の墓塚掘り方の上端部を一部切って掘り込まれている。棺内から人骨、人歯、副葬品などは検出されなかった。

(520)は棺身の壺である。口縁部を打ち欠いており欠損している。体部は中位付近で強く丸く張り出している。体部の最大径は中位よりやや下にあり、そのため下膨れの感がある。器面の調整は体部外面下位は底部を中心に構方向に分解したヘラミガキ、体部中位以下は縦方向のヘラミガキで、内面は刷毛調整を施している。生駒西麓産の土器である。体部最大径36.2cm、現有



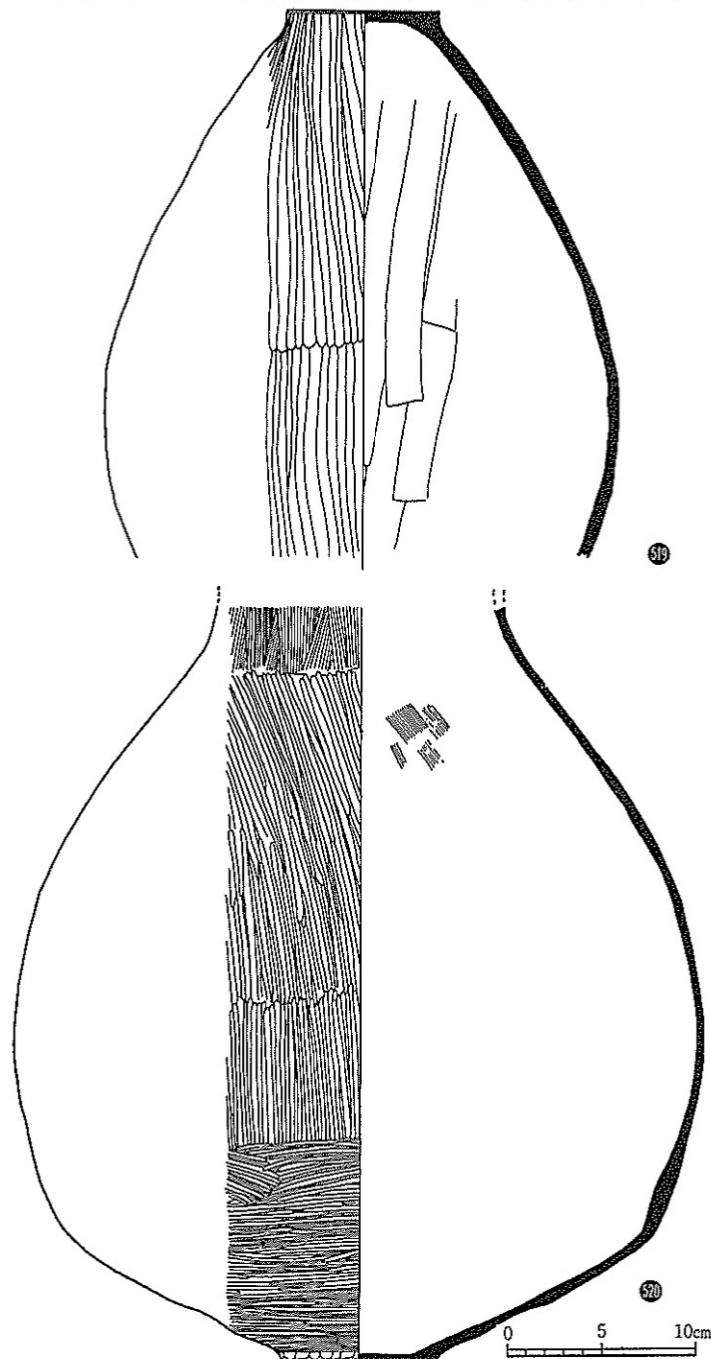
第176図 3号土器棺

器高約40cmを測った。(519)は蓋であり、甕の口縁部を打ち欠いて使用している。体部は中位よりやや上でなだらかに張り出している。器面の調整は体部外面を縦方向のヘラミガキ、内面はヘラ削りの後に刷毛調整を施している。暗茶褐色を呈しており、生駒西麓産の土器である。体部最大径27cm、現有器高29cmを測った。

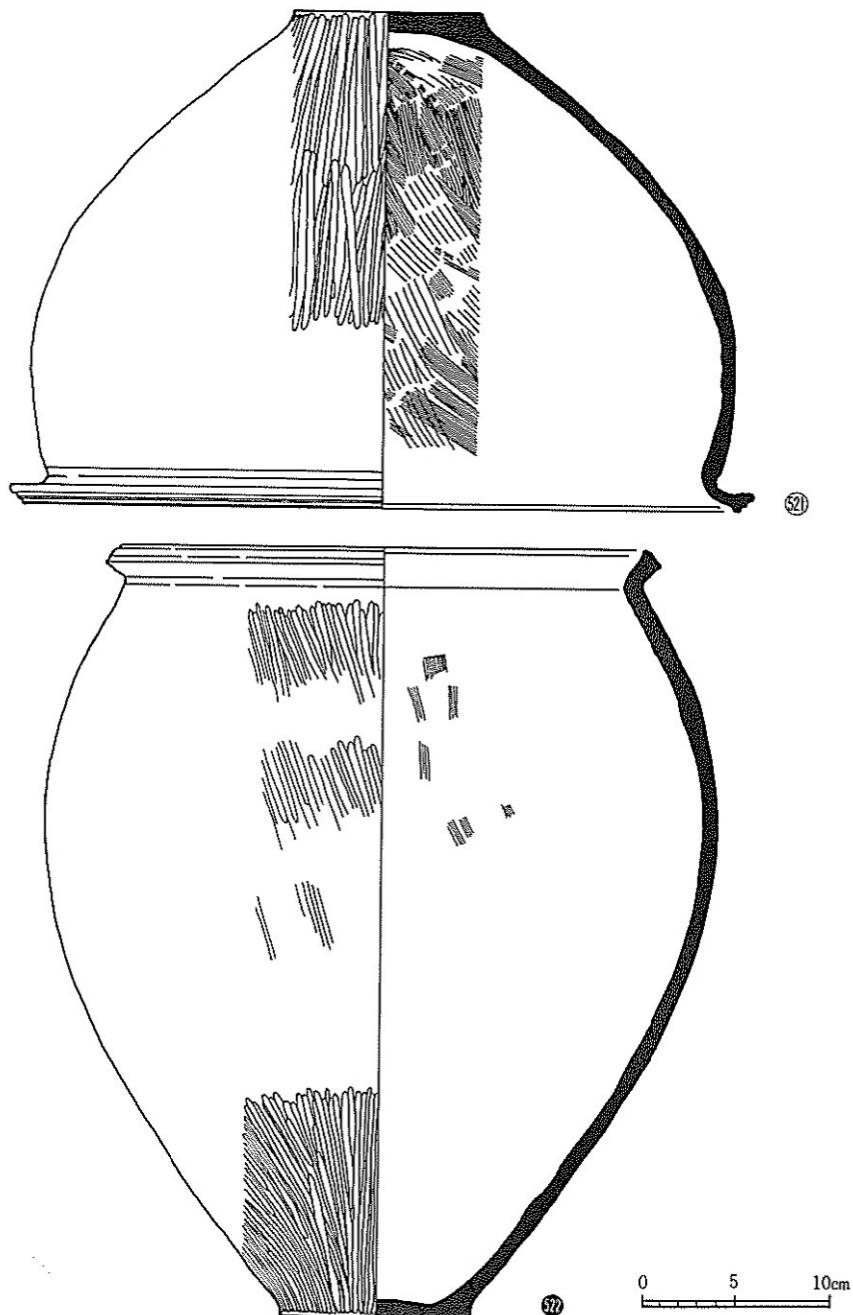
5号土器棺 2号土器棺の南西方の、墳丘中央部やや東寄りで検出した。盛土第2層の灰青緑

色砂混り粘土内の、墳頂部より約50cm下で検出されたが、掘り込み面は盛土最上層である。棺身は甕で、蓋には鉢を転用して被せ、斜めに寝かせていた。頭位はN—20°—Wの方向にある。棺内底面付近から粒状に風化した人骨が認められ、鉄製品が副葬されていた。鉄製品は腐蝕が著しく、取り上げ後に保存処理を試みたが不可能な状態であった。長さ約30cm、幅約4cmで、鉄刀と思われる。

(522)は棺身の甕である。短く、外上方に立ち上がり終る口縁部で、端部はわずかに上下に肥厚する。体部は中位よりやや上で丸く張り出し、体部の最大径が上位にあるので丸味をおびているわりにすっきりした形状を呈している。口縁端部外面に凹線文を配する。器面の調整は体部外面をヘラミガキし、内面は刷毛調整による。茶褐色を呈し、胎土に角閃石が含まれており、生駒西麓産の土器である。口径27.6cm、器高40.8cmを測った。(521)は蓋で、鉢を転用している。口縁部は短く、水平



第177図 4号土器棺



第178図 5号土器

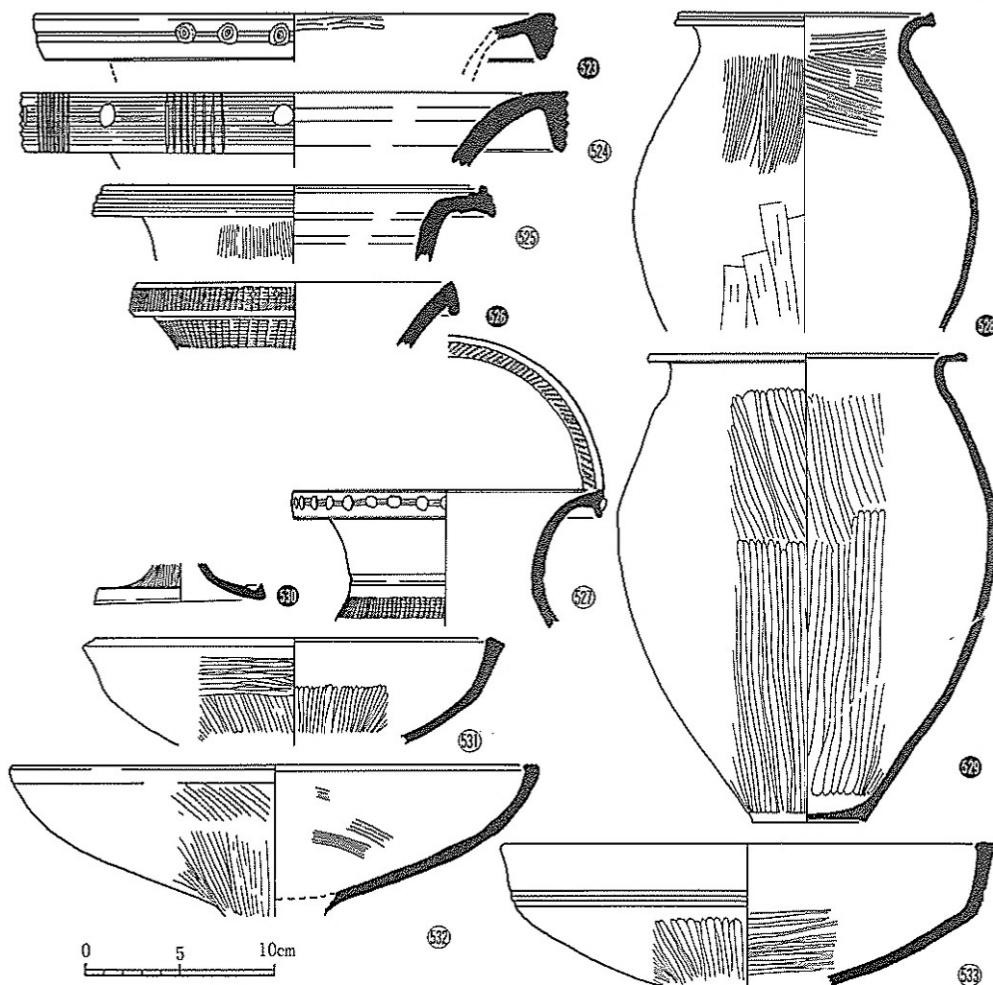
に近く外反する。口縁端部は上下に肥厚している。体部は丸味を持った形状を呈しており、体部最大径は口径を凌駕しない。口縁端部外面に凹線文を配する。器面の調整は体部外面を縦方向のヘラミガキ、体部内面は比較的密な刷毛調整であるが、一部分荒い所が認められる。口径39.4cm、器高26.2cmを測った。

〈供献遺物〉 供献遺物には土器、石器などがみられる。これらは北東周溝内、北西周溝内、盛

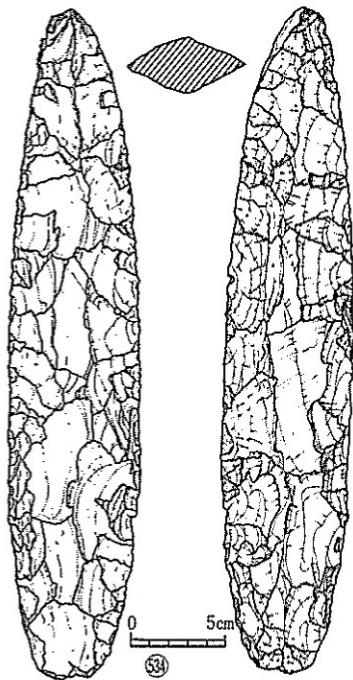
土内より各々検出されたが、そのほとんどが破片であり、完形に近い状態で原位置を保っていると思われるものはみられなかった。出土地は北東周溝内（523、528～530）、北西周溝内（524～527、531、534）、盛土内（532、533）である。

(523～527)は壺であり、すべて口縁部のみの破片である。小片であるが各々に特徴がみられる。

(523)は口縁端部が下に肥厚するもので、口縁端部外面に凹線文を配し、その上に3個ないし4個を1単位とする円形浮文を貼り付けている。円形浮文の表面に凹みがあり、その部分に朱を塗付している。口径27.2cmを測った。(524)は口縁端部が下方に強く屈曲するもので、口縁端部外面に凹線文を配する。そしてさらに、その上から8条を1単位とする縦方向の凹線文(幅約3cm)と円形浮文を交互に配している。口径28.6cmを測った。(525)は口縁部が外方へ屈曲し、口縁端部が上下に肥厚するもので、口縁端部外面に凹線文を配する。口径20cmを測った。(526)は口縁端部が下に屈曲するもので、口縁端部外面に簾状文と刺突文を組み合わせて配しており、頸部にも簾状文を配している。口径16.8cmを測った。(527)は水平に屈曲する口縁部で、口縁端部は上下に肥厚するものであ



第179図 1号方形周溝墓周溝・盛土内出土遺物



第180図 1号方形周溝墓周溝内出土遺物

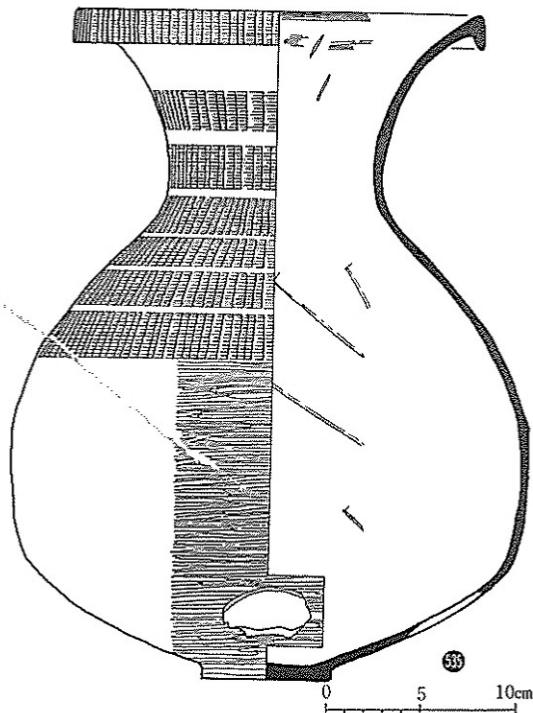
る。口縁端部外面に凹線文を配し、その上に円形浮文を付す。口縁端部内面に列点文を配する。頸部には幅5mmの沈線を1条巡らし、体部上端には簾状文がみられる。口径16.2cmを測った。(528)は頸部が短く立ち上がり、口縁部は水平に屈曲する。口縁端部は上下に肥厚するもので、体部は中位で強く張り出す。口縁端部外面に凹線文を配する。器面の調整は体部外面上半を刷毛調整、下半はヘラ削り、体部内面は刷毛調整による。口径13.6cmを測った。(529)は甕である。短い頸部から口縁部がほぼ水平に屈曲する。口縁端部はわずかに下に肥厚している。体部は中位よりやや上で強く張り出す。器面の調整は体部内、外面ともに縦方向のヘラミガキである。口径16.8cm、器高24.8cmを測った。(530)は脚部で、裾端部が上に肥厚する。底部径9cmを測った。(531)は高壺の壺部で、体部は腰部にわずかに稜を持ち、口縁端部が内外に肥厚する。調整はヘラミガキによ

る。口径22cmを測った。(532)も高壺の壺部で、丸味を持った壺底部から口縁部が内弯気味に浅く立ち上り、口縁端部は内に肥厚する。器面の調整は壺底部外面はヘラミガキ、口縁部外面は刷毛調整、内面も刷毛調整による。口径27.6cmを測った(534)は石槍である。ほぼ完形器で、両側縁より緻密な調整剝離を両面に施している。石材質はサヌ

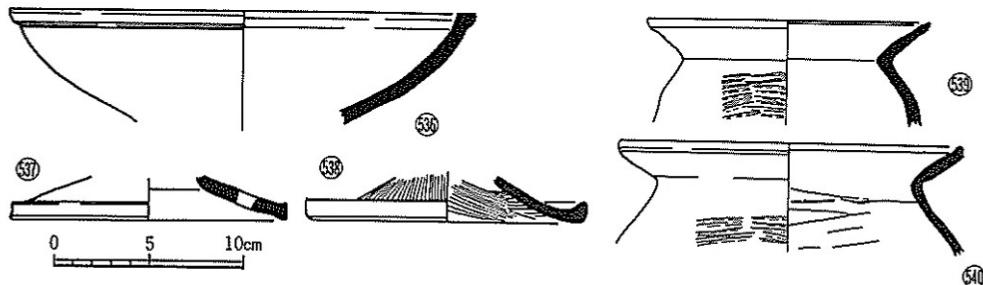
カイトである。長さ17.6cm、幅3.4cm、厚さ1.2cmを測った。

以上の土器棺、供獻土器には、一部若干古い様相を呈するものもみられるが、ほぼ第Ⅳ様式に含まれるものであり、したがって、1号方形周溝墓は弥生時代中期後葉に属するものといえる。

〈弥生時代中期遺構面出土土器〉トレンチの東半部で検出された弥生時代後期の自然河川は、トレンチ内で2本の自然河川が合流し1本となって北流するものであるが、その合流地点の中洲地帯の、弥生時代中期に相当する面から壺が1個体ほぼ完形で横倒しになった状態で検出された(535)。これは、頸部から口縁部にかけて外反しつつ外上方へ立ち上がるもので、口縁端部は下方へ屈曲する。体部は中位で強く丸く張り出す。体部の最大径は中央よりやや下に



第181図 弥生中期遺構面出土遺物



第182図 弥生時代後期自然河川出土遺物

あり、下膨れの感がある。口縁端部外面に簾状文を1帯、頸部から体部上半にかけて簾状文を6帯配している。体部下端付近に穿孔を1ヶ所有する。焼成後の穿孔である。器面の調整は体部外面をヘラミガキし、内面はヘラ削り、口縁部内面には刷毛調整を施している。生駒西麓産の土器である。口径21.2cm、器高35.4cmを測った。

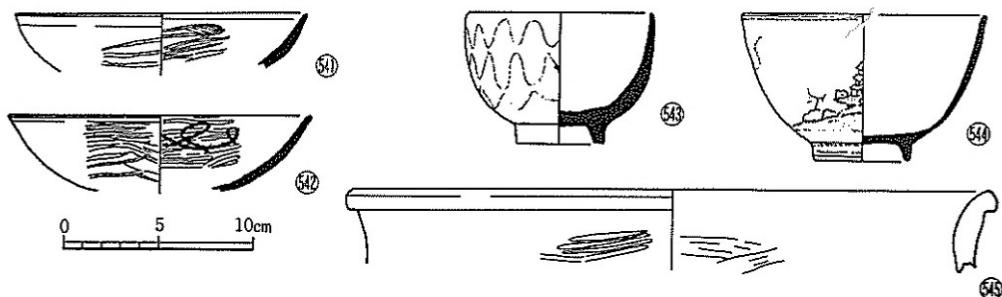
土器の出土地点は河川の合流地点付近であり、地形は原形が大幅に崩れているものと思われるが、この土器には底部付近に穿孔がみられ、中洲自体が方形周溝墓であった可能性も考えられ、もしそうであれば、土器の形態からみて1号方形周溝墓とほぼ同時期のものといえる。

第3項 弥生時代後期

弥生時代後期の面は灰青色粘土上面であり、この面を肩とする自然河川を検出した。

〈自然河川〉 トレンチの東半部で検出した。南から北流する幅約2.5mの流路と、東から北西へ流れる幅7m以上の流路が合流し、北西へ流れている。川幅や合流後の流路の方向からみて東から北西へ流れるのが本流であり、南から北流するのは支流であると思われる。河川内には灰色砂利が主として堆積しており、灰色シルトなどがブロック状に含まれている。河川埋没直後には城山遺跡からも検出されている黒色粘土の堆積がみられ、この粘土は弥生時代後期中葉から古墳時代前期前半にかけて堆積したものであるので、この自然河川は弥生時代後期前葉の範囲の比較的短期間存在していたものといえる。

出土遺物（536～540）（537）口縁部外面に凹線文を配する高坏の坏部で、端部は内外に肥厚している。（537、538）は脚部の破片で、（537）には円孔がみられ、（538）には刻目文がみられる。（539・540）は壺の口縁部である。外に方へ短く立ち上がる口縁部で、端部は軽く上方へつまみ出す。体部外面に平行タタキが施されている。



第183図 中・近世自然河川出土遺物

第4項 中・近世

中・近世の遺構としては、トレンチの大半にわたって、南から北流する自然河川を検出した。

〈自然河川〉 トレンチの西半部で、南から北流する自然河川の肩部を検出した。この肩は西側の肩であり、東側肩部はトレンチ東壁の外にある。この河川は城山遺跡(その1)地区の北端部で検出された自然河川に続くもので、この後さらに北流し亀井遺跡ではN R 9002と称される自然河川となる。いわゆる東除川の本流である。河川内の埋土は盛土の直下から検出されており、砂利、シルト、粘土などがブロック状に堆積していた。深さ約2.6mを測った。

出土遺物(541～545)(541、542)は瓦器椀である。内、外面ともにヘラミガキを施している。(543)には内面に螺旋状暗文がみられる。(533、544)は染付け磁器の椀である。(545)は甕の口縁部である。

これらの遺物は東除川の流れ始め(14世紀後半)及び、1704年大和川付け替えの際に埋没したとされる事実に矛盾しないものといえる。

第5項 まとめ

本調査区は非常に狭小なトレンチであるために、検出した各遺構もその全容を明らかにする事ができたものは無かった。しかし、調査区は亀井遺跡の調査区の南端部にあたり、亀井遺跡と城山遺跡を繋ぐ位置にあるため、その成果が注目された。結果としては弥生時代中期及び中、近世の遺構にみるべきものがあったといえる。以下その成果についてまとめてみる。

まず第一の成果として弥生時代中期後葉(第IV様式)の方形周溝墓が検出された事があげられる。この方形周溝墓の検出によって、時期的な幅はあるが亀井遺跡の旧平野川南岸以南より城山遺跡北半部に至るまでの広大な地域に、方形周溝墓からなる墓域が形成され続けた事が判明した。今後、両遺跡の方形周溝墓の個々の検討を重ねる事により、両遺跡の方形周溝墓の時期的な変遷も明らかになってくるものと考える。

次に、城山遺跡で検出された東除川本流の流路が、亀井遺跡N R 9002にまで接続するものである事が、31トレンチで河川肩を検出した事により明確となった。さらに、出土遺物は城山遺跡で検出された遺物との関係において矛盾点はみられず、東除川が14世紀後半から18世紀初頭まで存在していた事がより確実となった。

以上、トレンチの狭小さに反して成果は大きかったが今後これらの成果をふまえ、さらに周辺地域の調査が進展するにつれ、いわゆる亀井ムラの変遷がより明確になるものと考える。